

ほんえいじばるいせき
本永寺原遺跡

基幹農道整備事業小田元4期地区A工区に伴う埋蔵文化財発掘調査



2022

宮崎市教育委員会

ほんえいじばるいせき

本永寺原遺跡

基幹農道整備事業小田元4期地区A工区に伴う埋蔵文化財発掘調査



2022

宮崎市教育委員会



本永寺原遺跡空中写真（合成）



C区炉穴検出状況（炉穴 1）



A区遺構検出状況（石壠、廃棄遺構、石圓遺構、井戸）

序

宮崎市は、太陽と緑豊かな宮崎県の県都として、日々発展を続けています。市内では様々な開発事業が行われていますが、地中には遺跡（埋蔵文化財）と呼ばれる、われわれの先祖が残した生活の痕跡が残っています。開発により消失を余儀なくされた埋蔵文化財を記録し、過去の人々の生活を伝えるため、我々は発掘調査を実施し、報告書にまとめています。

今回発掘調査を行った本永寺原遺跡は、小林市との境界付近である高岡町浦之名にあります。道路建設に伴う調査でしたが、今から約2万年前の旧石器時代の狩りに使用した石器、縄文時代の調理施設、中世の建物群、江戸時代の井戸、陶磁器や瓦などを捨てた跡が確認されました。これらの成果は、小林盆地と宮崎平野を繋ぐ交通の要衝であったこの地に、繰り返しが住んだ事を示しています。特に江戸時代は、ここに本永寺という寺院が建てられ、人々の信仰を集めました。現代に生きる私たちは、こうした先人達の記憶を未来へ残してゆかねばなりません。

夏は台風により道路が寸断され、復旧まで作業が中断しました。冬には霜柱や突風にもなやまされました。こうして報告書の刊行に至ることができたのも、厳しい環境の中、発掘作業に携わった方々のご協力によるものです。末尾ではございますが、この場を借りまして心よりお礼申し上げます。

令和4年3月

宮崎市教育委員会

教育長 西田 幸一郎

例　言

1. 本書は、基幹農道整備事業小田元4期（道路建設）に伴って実施された、宮崎県宮崎市高岡町浦之名に所在する本永寺原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本業務は、宮崎県中部農林振興局より委託され、現地の発掘調査を平成30年6月1日から平成31年3月22日、整理作業を令和元年度から令和3年度にかけて実施した。
3. 調査組織は以下のとおりである。

調査主体 宮崎市教育委員会

平成30年度（発掘調査）

文化財課　課長　富永　英典
調査総括　主幹兼係長　井田　篤
調整事務　主任技師　河野　裕次
庶務事務　主　事　杉尾　悠
調査員　主　査　金丸　武司
嘱託員　白上いづみ
古田矩美子

令和元年度（整理作業）

文化財課　課長　富永　英典
整理総括　主幹兼係長　井田　篤
調整担当　主任技師　石村　友規
庶務担当　主　事　補　高田　真帆
整理担当　主　査　金丸　武司
嘱託　佐伯美佐子

令和2年度（整理作業）

文化財課　課長　白坂　敦
整理総括　主幹兼係長　井田　篤
調整担当　主任技師　石村　友規
庶務担当　主　事　高田　真帆
整理担当　主　査　金丸　武司
会計年度任用職員　佐伯美佐子

令和3年度（整理作業）

文化財課　課長　白坂　敦
整理総括　主幹兼係長　井田　篤
調整担当　主任技師　石村　友規
庶務担当　主　事　高田　真帆
整理担当　主　査　金丸　武司
会計年度任用職員　佐伯美佐子

4. 現地における測量は、金丸、白上、古田が行い、石塀、井戸を有限会社ジバング・サーベイに委託した。
5. 遺物の実測・トレースは生目の杜遊古館（宮崎市埋蔵文化財センター）にて金丸、秋成（埋蔵文化財調査係長）、佐伯及び室内整理作業員が行い、近世陶磁器を株式会社島田組大分営業所に委託した。
6. 遺構の写真撮影は金丸、白上、古田が行い、空中写真撮影は、（有）スカイサーバイ九州に業務委託した。また出土遺物の写真撮影は金丸が行った。
7. 炉穴の埋土中から採取した炭化物は、株式会社古環境研究センターに放射性炭素年代測定を委託した。
8. 本書で使用する北は真北である。
9. 本書で使用する図面は以下の縮尺で掲載している。
掘立柱建物 (S=1/80) 土坑 (S=1/10, 1/30, 1/40, 1/60) 炉穴 (S=1/60) 石塀遺構 (S=1/60)
石塀 (S=1/60) 井戸 (S=1/60) 廃棄遺構 (S=1/60) 石器 (S=2/3 または 1/2) 土器・陶磁器 (S=1/3 または 1/4) 瓦 (S=1/3 または 1/4)

10. 土色の表記は『新版 標準土色帳』に依拠した。
11. 出土遺物及び掲載図面及び写真、記録等は宮崎市教育委員会で保管している。資料の閲覧・利用についての問い合わせは、事前に宮崎市教育委員会まで。
12. 本書に掲載した写真高岡郷全絵図（紙屋口浦之名村道筋素図）の撮影は、宮崎神宮及び宮崎県総合博物館の協力を得た。
13. 本書の執筆や編集は金丸が行った。なお、第4章は株式会社 古環境研究センターが執筆しており、章立て等細部の修正を金丸が行った。
14. 本発掘調査にかかる文書手続きは以下のとおりである。

（平成29年度）

工事通知（文化財保護法第94条）平成30年2月16日 宮教文第998号1（進達）
平成30年3月1日 宮教文第998号3（伝達）

（平成30年度）

着手報告（文化財保護法第99条）平成30年9月27日 宮教文第143号3

発見通知（文化財保護法第100条）平成31年3月27日 宮教文第143号10

終了報告 平成31年3月29日 宮教文第143号13

（平成31年度）

保管証 平成31年4月6日 宮教文第114号

目 次

本文 目 次

第1章 はじめに.....	1
第1節 地理的環境.....	1
第2節 歴史的環境.....	1
第3節 調査に至る経緯.....	4
第4節 調査の概要.....	4
第2章 B・C区の調査	7
第1節 調査の概要.....	7
第2節 層序.....	7
第3節 旧石器時代.....	7
第1項 概要.....	7
第2項 出土遺物.....	11
第4節 繩文時代.....	14
第1項 概要.....	14
第2項 検出遺構.....	19
1. 炉穴	19
2. 土坑	26
3. 埋納土坑	26
第3項 出土遺物.....	27
第5節 中世.....	27
第1項 概要.....	27
第2項 検出遺構.....	27
1. 据立柱建物	27
2. 土坑	28
第3項 出土遺物.....	28

第6節 近世.....	28
第3章 A区の調査.....	29
第1節 調査の概要.....	29
第2節 層序.....	29
第3節 繩文時代.....	29
第4節 近世以降.....	29
第1項 概要.....	29
第2項 検出遺構.....	29
1. ピット群	29
2. 石固造構	29
3. 土坑	30
4. 石塀	30
5. 井戸	33
6. 廃棄遺構	34
7. 造成跡	49
第3項 表土中の出土遺物.....	49
第4章 自然科学分析.....	58
第1節 はじめに.....	58
第2節 試料と方法.....	58
第3節 測定結果.....	58
(1) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値	58
(2) 放射性炭素(^{14}C)年代測定値	58
(3) 历年代(Calendar Years)	58
第4節 所見.....	59
第5章 総括.....	61

挿 図 目 次

第1図 本永寺原遺跡周辺地形図.....	2
第2図 本永寺原遺跡調査区位置図.....	3
第3図 三国名勝図会 本永寺.....	6
第4図 B・C区土層柱状模式図	7
第5図 B区旧石器時代遺物実測図(1).....	8
第6図 B区旧石器時代遺物実測図(2).....	9
第7図 B区旧石器時代遺物実測図(3).....	10
第8図 B区旧石器時代遺物分布図(VII層).....	11
第9図 B区旧石器時代遺物分布図 (VI・VII層)(1)	12
第10図 B区旧石器時代遺物分布図 (VI・VII層)(2)	13
第11図 C区繩文時代炉穴分布図.....	14

第12図 C区繩文時代炉穴実測図(1).....	15
第13図 C区繩文時代炉穴実測図(2).....	16
第14図 C区繩文時代炉穴出土遺物.....	16
第15図 C区繩文時代土坑実測図.....	17
第16図 B・C区繩文時代出土遺物実測図(1)	17
第17図 B・C区繩文時代出土遺物実測図(2)	18
第18図 C区繩文時代埋納土坑実測図.....	19
第19図 C区繩文時代埋納土坑出土遺物実測図	19
第20図 B・C区繩文時代遺物分布図	20
第21図 C区中世検出遺構配置図	21

第22図	C区中世掘立柱建物実測図(1).....	22
第23図	C区中世掘立柱建物実測図(2).....	23
第24図	C区中世土坑実測図.....	26
第25図	C区中世出土遺物実測図.....	26
第26図	C区近世遺物実測図.....	27
第27図	A区遺構配置図.....	30
第28図	A区近世遺構及び出土遺物実測図.....	31
第29図	A区近世井戸実測図.....	32
第30図	A区石壙実測図.....	33
第31図	A区廐棄遺構遺物集中区図.....	34
第32図	A区廐棄遺構出土遺物実測図(1).....	35
第33図	A区廐棄遺構出土遺物実測図(2).....	36
第34図	A区廐棄遺構出土遺物実測図(3).....	37
第35図	A区廐棄遺構出土遺物実測図(4).....	38
第36図	A区廐棄遺構出土遺物実測図(5).....	39
第37図	A区廐棄遺構出土遺物実測図(6).....	40
第38図	A区廐棄遺構出土遺物実測図(7).....	41
第39図	A区廐棄遺構出土遺物実測図(8).....	42
第40図	A区廐棄遺構出土遺物実測図(9).....	43
第41図	A区廐棄遺構出土遺物実測図(10).....	44
第42図	A区廐棄遺構出土遺物実測図(11).....	45
第43図	A区廐棄遺構出土遺物実測図(12).....	46
第44図	A区廐棄遺構出土遺物実測図(13).....	47
第45図	A区造成部分土層断面図.....	48
第46図	A区の土層堆積変遷図.....	49
第47図	A区廐棄遺構出土遺物実測図(14).....	50
第48図	A区表土出土遺物実測図.....	51
第49図	曆年較正結果.....	60

表 図 版

第1表	出土石器観察表.....	52
第2表	出土土器観察表.....	53
第3表	出土陶磁器観察表(1).....	54
第4表	出土陶磁器観察表(2).....	55
第5表	出土陶磁器観察表(3).....	56

第6表	出土瓦観察表.....	57
第7表	放射性炭素年代測定方法と試料リスト.....	58
第8表	放射性炭素年代測定結果.....	59

写 真 図 版

図版1	本永寺原遺跡空中写真(合成).....	1
 卷頭図版1	
図版2	C区炉穴検出状況、A区遺構検出状況.....	2
 卷頭図版2	
図版3-1	本永寺跡三師塔.....	3
図版3-2	本永寺跡墓地.....	3
図版4	高岡郷全絵図.....	5
図版5	調査区別空中写真.....	65
図版6	旧石器時代・縄文時代遺構(炉穴).....	66
図版7	縄文時代遺構(炉穴・土坑).....	67
図版8	中世遺構(掘立柱建物・土坑).....	68

図版9	近世遺構(石垣遺構).....	69
図版10	近世遺構(石壙・廐棄遺構・井戸).....	70
図版11	近世遺構(井戸).....	71
図版12	旧石器時代出土遺物1.....	72
図版13	旧石器時代出土遺物2.....	73
図版14	縄文時代出土土器.....	74
図版15	縄文時代出土石器1.....	75
図版16	縄文時代出土石器2.....	76
図版17	中世出土土器・近世以降出土石製品1.....	77
図版18	近世以降出土石製品2.....	78

第1章 はじめに

第1節 地理的環境

宮崎市高岡町は、宮崎平野の西部に位置する。町内の大部分は丘陵であるが、町内を流れる大淀川により深い谷が刻まれ、急峻な地形が形成される。一方で大淀川は傾斜が緩やかな場所では蛇行州を形成し、宮崎平野へと流れる。

今回発掘調査を実施した本永寺原遺跡は、宮崎市高岡町と小林市野尻町との市境付近にある本永寺原に立地する。小林市野尻町の東部に広がる漆野原台地は、幅を狭めながら宮崎市的小田元地区まで伸びている。本永寺原はその小田元地区から北東に伸びる細尾根の1km先にあり、400m × 250mの楕円形を呈する台地に位置する。この台地は南西から北東に向かって緩やかに傾斜しており、南西部は標高約130mで、北東部は標高約110mである。台地は急峻な谷に囲まれており、細尾根で繋がった小田元地区以外は地形的に隔離されている。また北東部には尾根状の突出部がある。なお、麓にある深水集落は、大淀川の蛇行州上に形成された集落であり、本永寺原とは、東側の細く急な坂道によって繋がっている。

第2節 歴史的環境

本永寺原遺跡周辺の遺跡分布は第2図に示したとおりである。ここでは、発掘調査により内容が把握できる遺跡を中心に説明する。

本永寺原遺跡から小田元遺跡へ繋がる尾根上に小田元第2遺跡が立地する。平成12年度の発掘調査では、旧石器時代の文化層を複数確認した。国府形ナイフ形石器、剥片尖頭器によるI期、ナイフ形石器、剥片尖頭器、台形石器によるII期、小型のナイフ形石器によるIII期、細石刃核、細石刃によるIV期に分けている。また縄文時代は田村・ヤトコロ式を主体とする押型文後半期の土器が出土している。

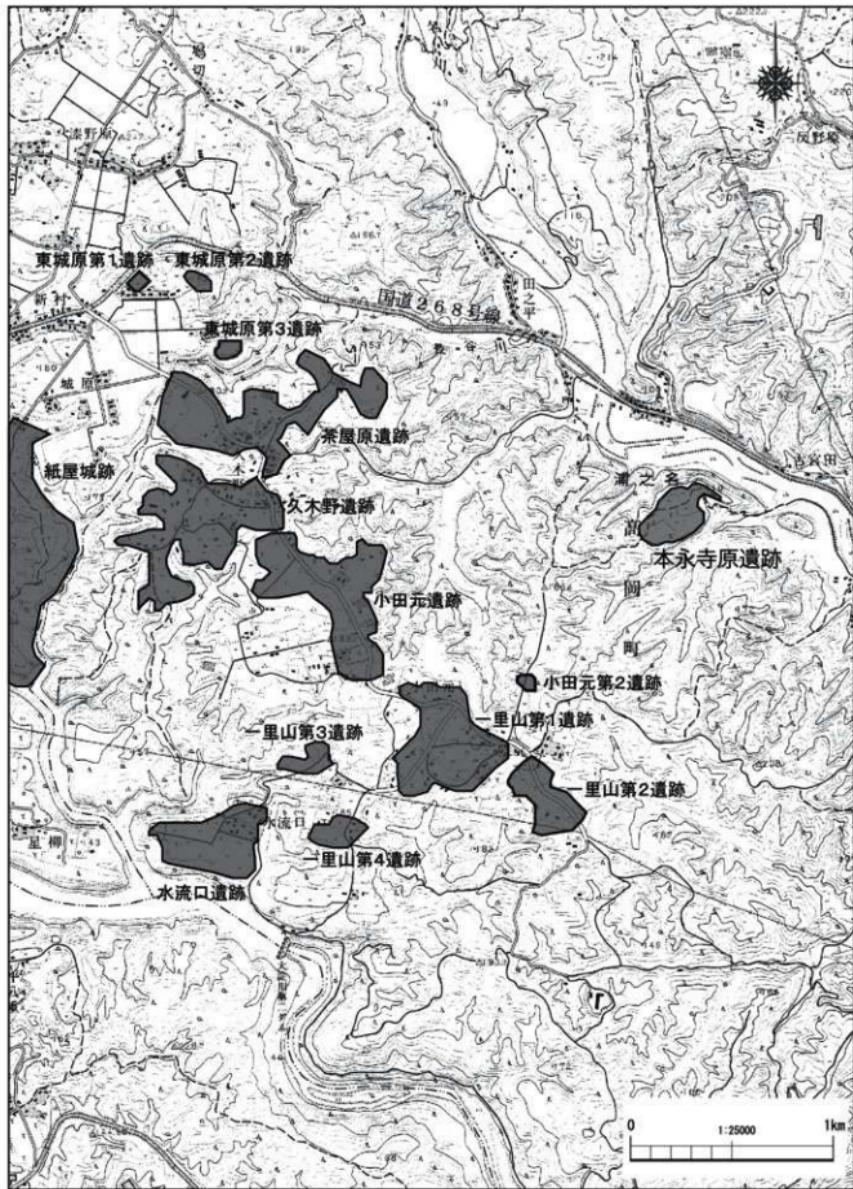
小田元地区には小田元遺跡、久木野遺跡が立地する。小田元遺跡は平成7年度の発掘調査で弥生時代末～古墳時代前半の竪穴建物が2軒、土坑を3基確認した。久木野遺跡は平成8年度に数カ所に分けた発掘調査で縄文時代早期の押型文土器や平桟式・塞ノ神式や早期末条痕文土器が集石遺構と共に確認された。

小田元地区的丘陵の付け根にある小林市（旧野尻町）紙屋地区の遺跡も紹介する。紙屋地区的台地中央に新村遺跡、東に東城原遺跡第1～第3遺跡が立地する。昭和60・61年度に実施された発掘調査では、どちらも旧石器時代のナイフ形石器・細石刃核、縄文時代早期前にあたる押型文土器や集石遺構が確認されている。

紙屋地区的丘陵西側には開析谷に区切られ半島状に突出した地形を利用して紙屋城址が築かれた。いわゆる「伊東四八城」にも数えられている。昭和62年度に実施された発掘調査では、曲輪毎に中世に相当する掘立柱建物やピット群、曲輪間には深さ7.8mに及ぶ薬研堀の大空堀が、輸入陶磁器等と共に確認された。宮崎平野と小林盆地の中間点の防御を目的として築かれたのである。

なお本永寺原は、近世に本永寺という寺院が造営されているため、併せて説明する。

本永寺は法華宗（日蓮宗）の寺であり、安房富士門流妙本寺の末寺である。寺の建立には二



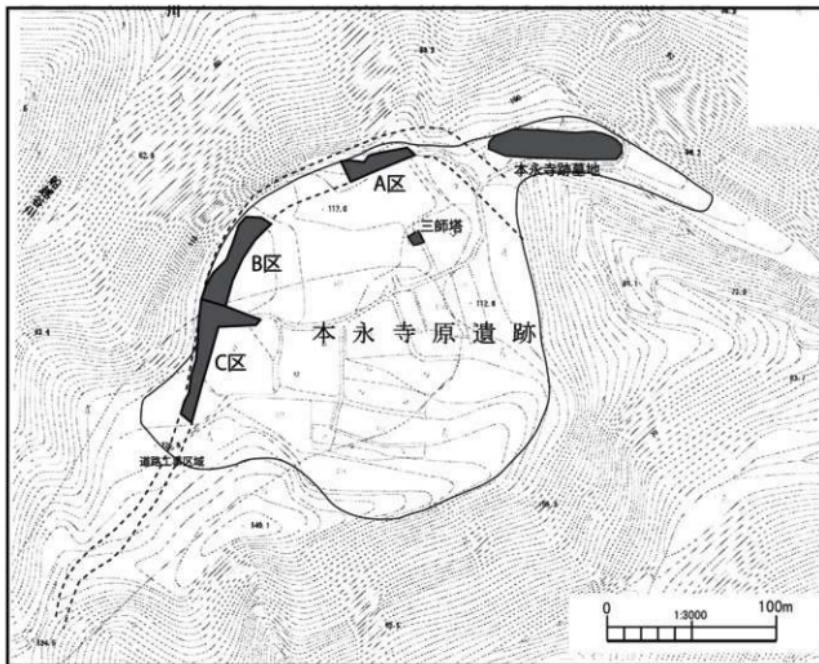
第1図 本永寺原遺跡周辺地形図



図版 3-1 本永寺跡三師塔



図版 3-2 本永寺跡墓地



第2図 本永寺原遺跡調査区位置図

説あり、「本永寺由緒井末寺帖」では『建武年間（1330年代）日朝により佐土原に建立され、長享二（1488）年、第八代住職日賢により都於郡に移設された』とあり、「当門徒前後案内置文」では、『日向國富士門流の学頭職であった定善寺（日向市）に他門流が流入したため妙本寺との関係が悪化、妙本寺より派遣された日朝は、両者を仲介しながらも定善寺を容認せず、長享二年に本永寺を建立した』とある。双方の説について、佐々木真理は佐土原時代の本永寺の実態が殆ど不明であること、記録に残る日朝の生年は応永十八～明応七（1411～1498）年であることから後者を有力視する（佐々木 2005）。その後本永寺は天文二（1533）年には久津良（現在の高岡麓）に移設したとされる。当時は寺領高千二百石、脇坊十二ヶ寺、僧侶以下三百人の大伽藍を成していたと記される。また本永寺より出でた日要が学頭職のまま妙本寺の住持となるなど、日向国の学頭坊として本寺との関係が強化されたのもこの頃である。本永寺は16世紀後半に兵乱を避けて高城の四家村に逃れた後、世情の安定した元和二（1616）年、この本永寺原で寺院を造営したとされる。

近世においても本永寺は学頭坊の権威となつたが、寺領を持たないため自力で修補できず、鹿児島藩に訴えた結果銀四貫目を与えられ、享保九（1724）年には毎年米十石のほか、住持交代の度に祝儀が下された。妙本寺との関係も続いており、文政三（1820）年には歴代住職に上人号が贈られた。幕末期の寺容は「三国名勝図会」に掲載され、挿図には祖師堂や引地坊、一段上に宝庫と建物の配置を見ることができる（第3図）。

本永寺は明治新政府による廃仏毀釈に伴い廃寺となるが、明治17年に高岡麓地区に移設された。跡地となった本永寺原には、3基の石碑を板碑や近世墓など66基の石像物が方形に取り囲んだ三師塔と呼ばれる石塔群と、台地北東部に突出した尾根部分に400基を超す石塔群、井戸跡が残されている。

第3節 調査に至る経緯

小田元地区の県営基幹農道整備事業は平成22年度に採択された。事業区域内には周知の埋蔵文化財包蔵地「本永寺原遺跡」が立地しており、台地中央部は寺院の中核施設の存在が高いため、事業と遺跡の取り扱いについて関係各局で調整を行った。まず、平成23年3月8日～11日にかけて市教育委員会が確認調査を実施、アカホヤ火山灰層を挟んで上面より埋土に土師器片を含む複数のピット、下位より石器や土器などを確認した。加えて未確認範囲については、平成26年12月22日・24日に県文化財課が確認調査を実施、近世の石列を確認した。この結果を受けて宮崎県中部農林振興局、市文化財課、県文化財課の間で埋蔵文化財の取り扱いを協議、発掘調査は準備の整った平成30年6月1日に開始した。

第4節 調査の概要

調査区が細長いため、道路の建設予定地内に現場事務所、駐車場、廃土置き場等を設置する必要があった。そのような理由から、調査区を第2図のようにA～C区に分割した。

まず5月にA区とB区に重機（バックホウ）による表土剥ぎを実施し両区の間の斜面上に堆土を置いた。6月上旬からはA・B区併行して人力で掘削と遺構検出を行った。A区は石壠や石囲遺構等の遺構と共に多くの遺物が確認された。一方B区は縄文時代早期の調査を終え、更



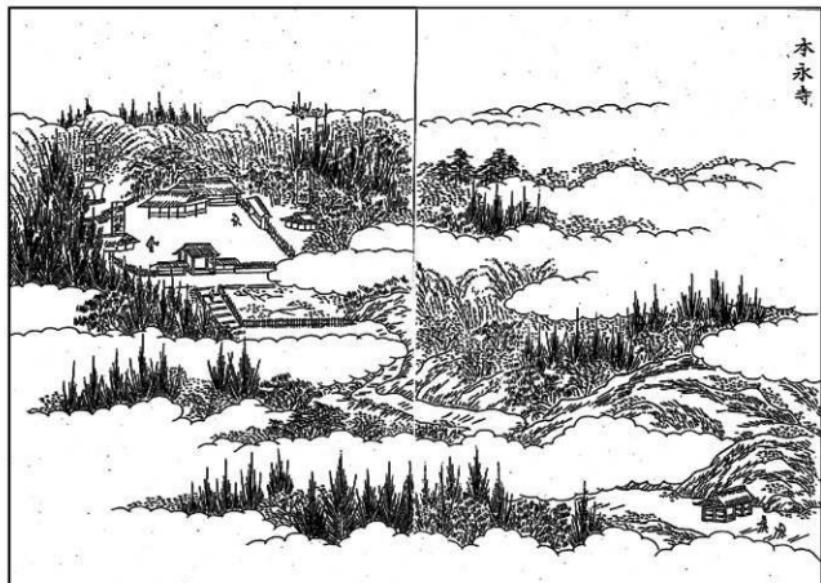
図版4 高岡郷全絵図（紙屋口浦之名村道筋素図）天保15年

に下層を調査したところ旧石器時代の遺物が出土。これを拡張すると始良胆沢火山灰の上層まで石器の出土を確認した。そのためB区の調査は8月下旬に終了した。

調査中は台風が度々襲来し、特に9月の台風18号では国道268号線が1週間通行不可となつた。小田元地区から調査区までの進入路も寸断され、修繕するまで1月半を要し、その間の発掘調査は中断することになった。

10月にはB区を廃土置き場として重機によるC区の表土剥ぎをおこなつた。その間集中して作業を行つたA区では、搅乱部分を人力で除去したところ井戸を検出した。その後表土剥ぎを終えたC区ではアカホヤ火山灰の面で柱穴が多数確認されたため遺構検出したところ、掘立柱建物群等を確認したため、その記録作業をおこなつた。

11月中旬より重機でC区のアカホヤ火山灰層を除去、11月下旬より縄文時代早期の遺物包含層を掘削した。この作業の進行中にC区南側において炉穴を複数確認した。A区の調査は12月までにはほぼ終了し、井戸の測量は業者に委託。それ以降はC区で炉穴の調査や記録を行なながら掘削作業を続け、3月末には埋め戻しを含めて全ての作業を終了した。



第3図 三国名勝圖会 本永寺

第2章 B・C区の調査

第1節 調査の概要

B・C区は本永寺原台地の西側辺縁部に立地する。北にB区、隣接して南にC区があり、合わせて長さ125m、幅20mの細長い調査区である。これ以外に、C区北端部は東に向かって幅約10m、長さ約30mの突出部が伸びている。調査区は南から北へ緩やかに傾斜するほか、C区中央以北は西から東に傾斜する。この傾斜は本永寺原の台地全体に共通しており、標高の高いB区は、北部はシラス付近まで、南側もアカホヤ火山灰層（III層）まで、現代の造成により土層が消失していた。

第2節 層序

B・C区内の土層堆積は、I層：表土（耕作土）、II層：黒色砂質土（高原スコリア）、III層：黄褐色砂質土（アカホヤ火山灰）、IV層：暗褐色硬化シルト質土（牛之脛ローム層）、V層：褐色シルト質土、VI層：暗褐色硬化シルト質土（霧島小林蛭石）、VII層：褐色シルト質土、VIII層：暗褐色硬化シルト質土、IX層：黄褐色硬化砂質土（姶良丹沢火山灰）、X層：黒褐色硬化シルト質土（ブラックバンド）、XI層：暗褐色シルト質土、XII層：褐色粘質土である。堆積の厚さは調査区内で異なっており、B区はIII層上面まで削平により消失していたほか、C区中央部以北はII層下位にスコリアを密に含む層（IIa層）、III層下位に粗粒の火山灰を含む層（IIIa層）が堆積するほか、C区北部は窪地が形成されていたためにIV層がオレンジバニスを高密に含む層（IVa・IVb層）とロームと混合する層（IVc・IVd層）に分離し堆積していた。

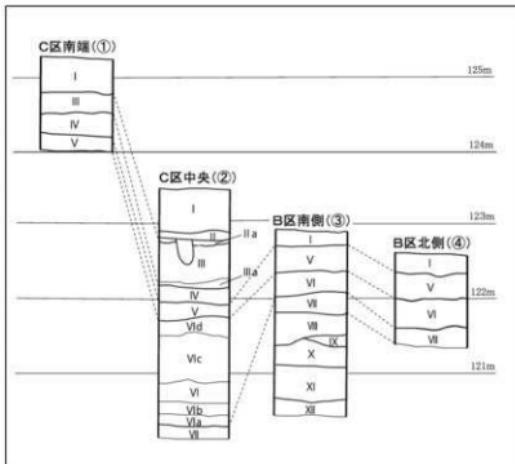
B・C区内の堆積は、第4図に柱状模式図を示した。このうち埋蔵文化財は、III層上面（中世）、IV・V層（縄文時代）、VI層、VII層、VIII層（旧石器時代）から確認された。

第3節 旧石器時代

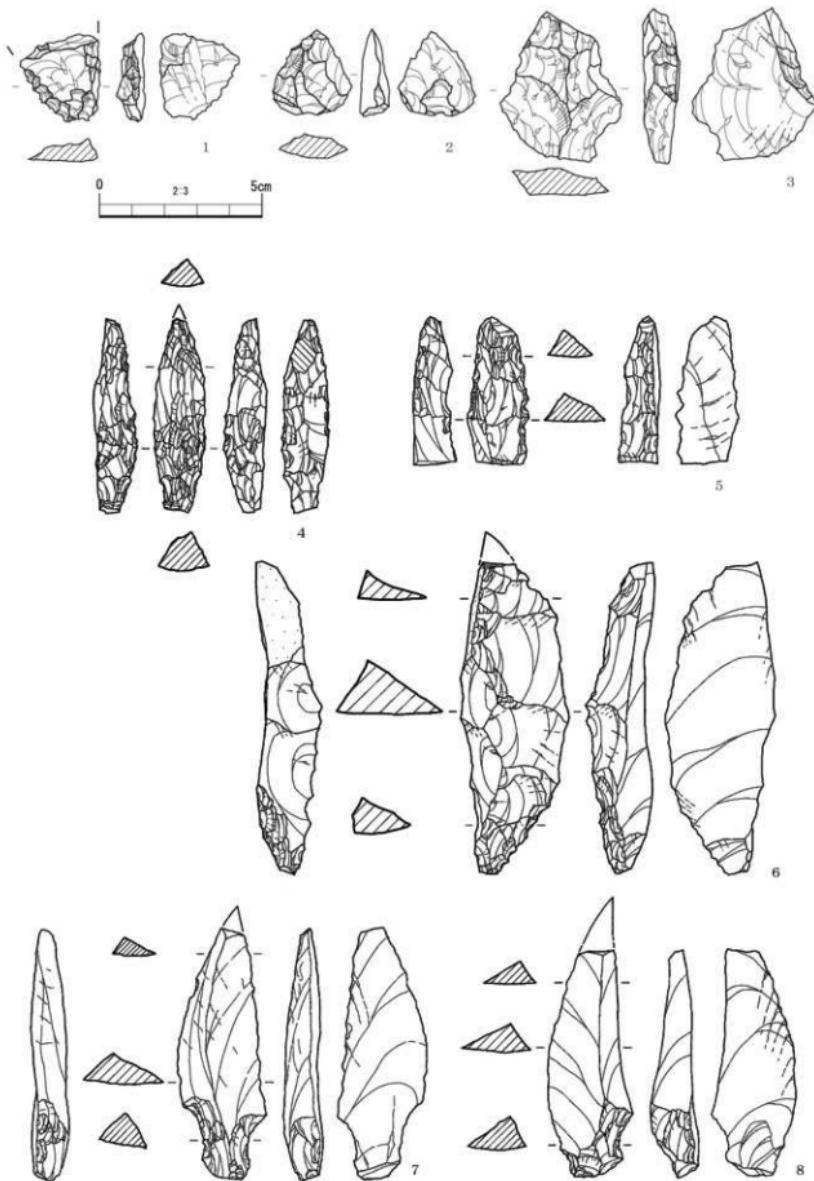
第1項 概要

B区において、旧石器時代の遺物の有無を確認するためトレンチを設定し掘削作業を行った。その結果、B区中央にてVII層より約150点の石器が出土した。更に下位のVIII層まで掘削したところ、約50点の石器が出土した。なお、VII層、VIII層では造構は検出されなかった。

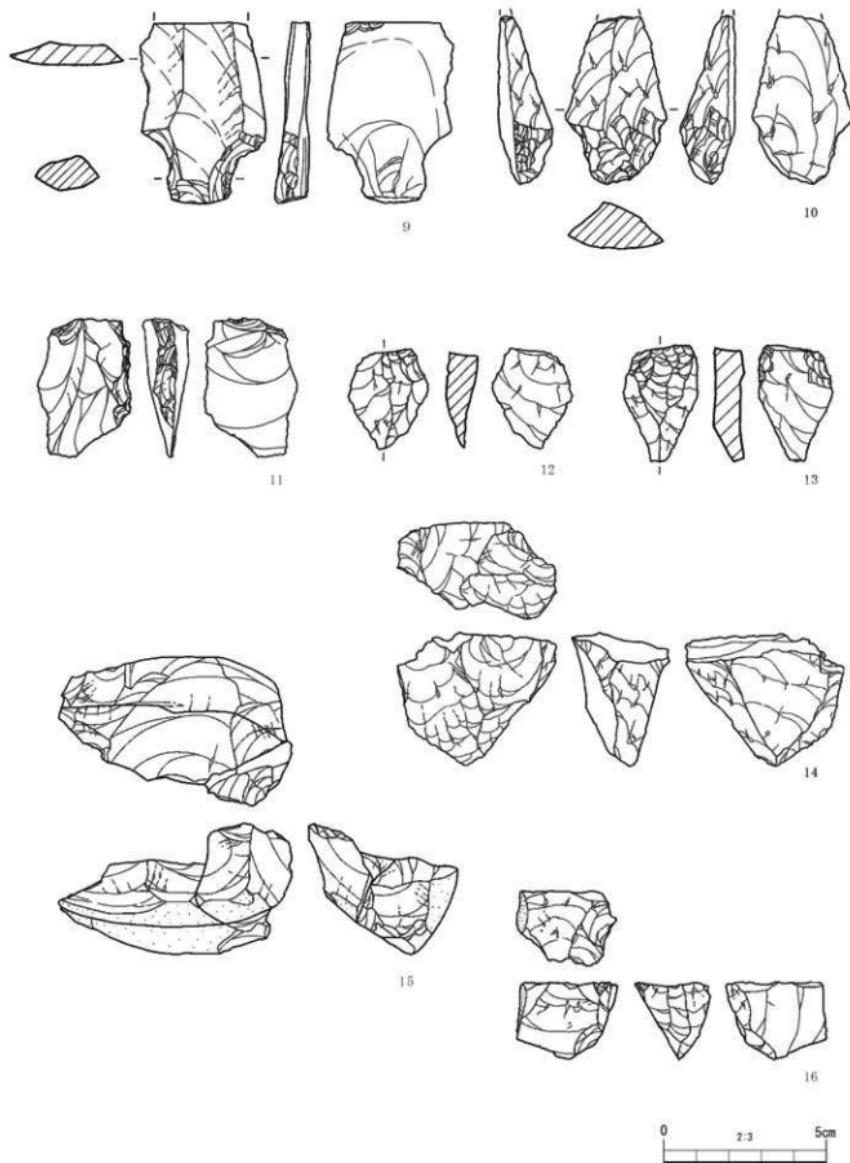
*第9図参照



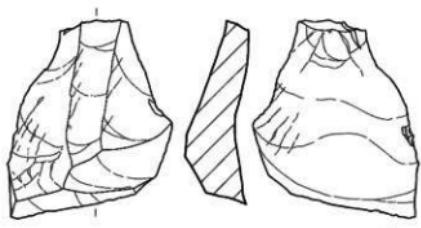
第4図 B・C区土層柱状模式図



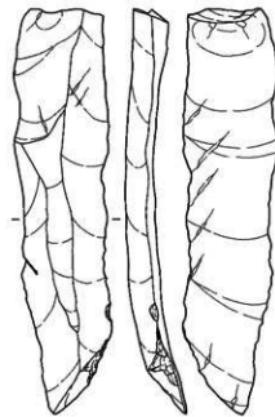
第5図 B区旧石器時代遺物実測図(1)



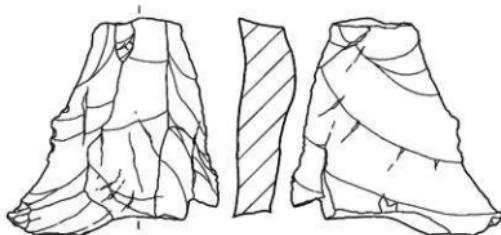
第6図 B区旧石器時代遺物実測図(2)



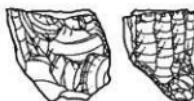
17



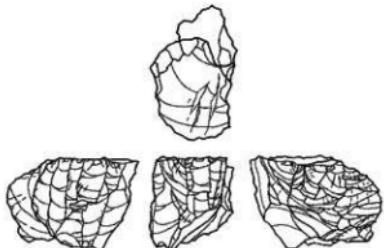
19



18



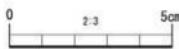
20



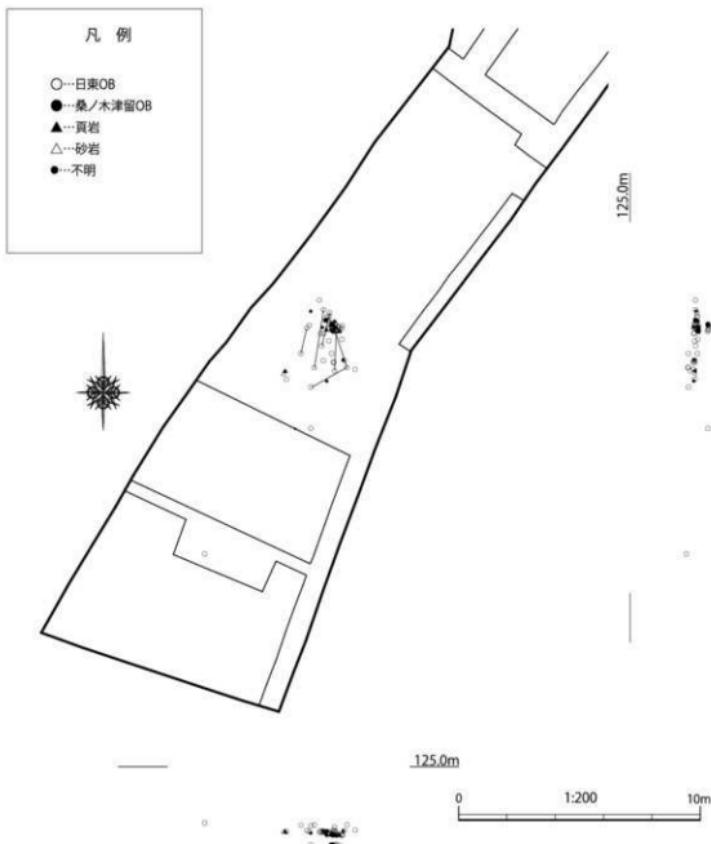
20 + 21



21



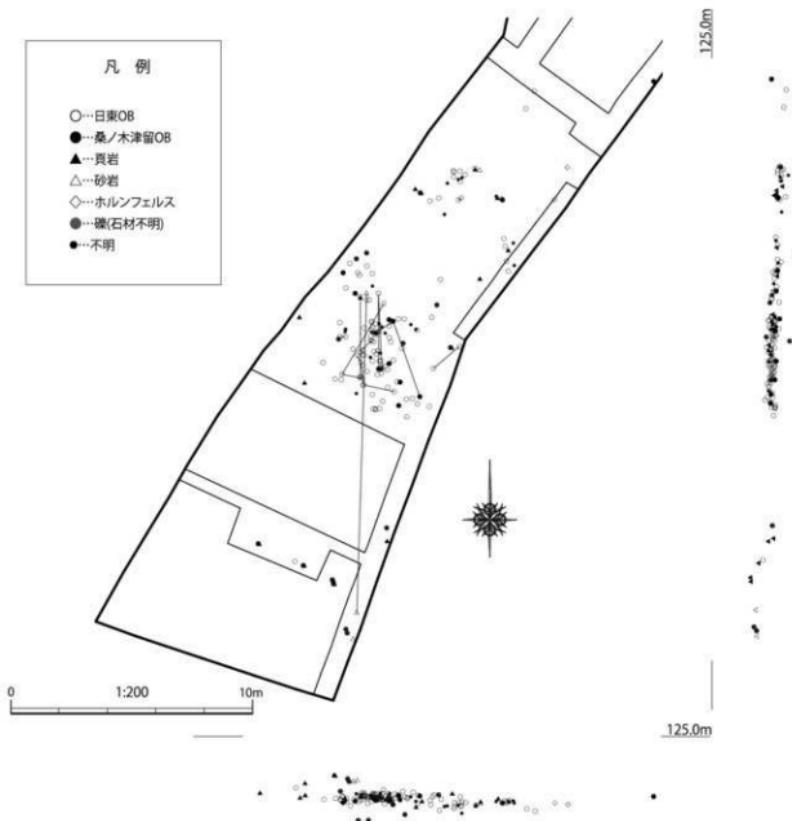
第7図 B区旧石器時代遺物実測図（3）



第8図 B区旧石器時代遺物分布図 (Ⅷ層)

第2項 出土遺物

1～3はⅧ層の出土遺物である。1は剥片の片側縁に連続的な調整を行う。もう片方の側縁にも調整を行うが、剥離角は比較的緩やかである。2つの側縁は下端部で窄まっている。この石器はナイフ形石器であり柄との接続部を作成中に折損により作業を中断した未製品と考えられる。2・3は二次加工剥片である。2は不規則な剥片剥離を行う中で作出された剥片の一辺に連続的剥離を行うほか、ボジ面にも剥離後の打撃痕が認められる。3は求心状に剥離を行った石核から採集された剥片の二辺に連続的剥離を行い、右側縁には抉りを設けている。



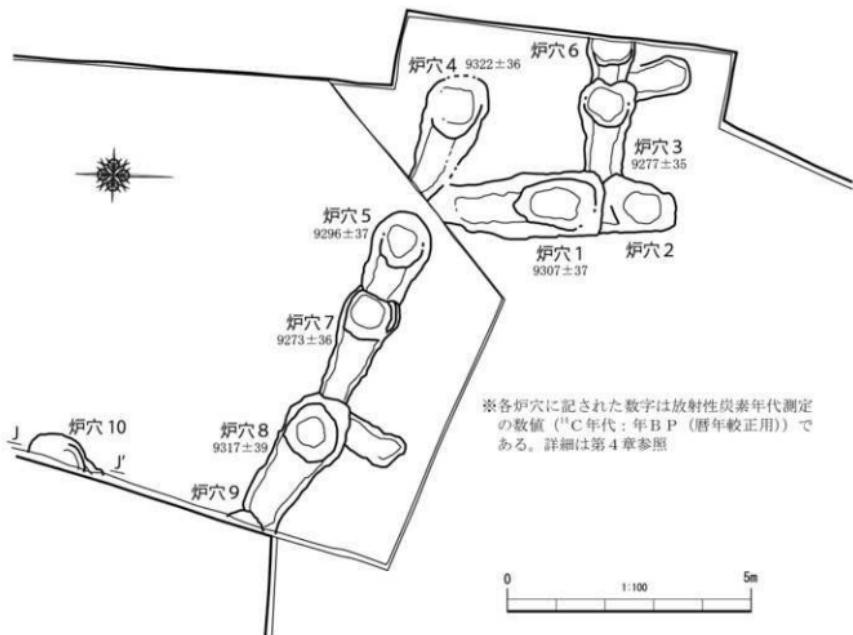
第9図 B区旧石器時代遺物分布図（VI・VII層）（1）

4以降はVII層の出土遺物である。4、5は角錐状石器である。4は3面に加工を施し、尖端部と下半部に微細な調整による成形を行う。5は横長剥片の上下に連続剥離を行った後、縁辺に微細な調整による成形を行う。全体的に調整が粗く、形状も不定形であることから、未製品の段階で折損により廃棄された可能性が高い。6は、礫面付近の礫に棱を作出すべく連続的な剥離を行った後、側面からの打撃により母岩から作出された棱を持つ縦長剥片の基部と尖端部に剥離を行い成形している。剥片尖頭器として分類したが、基部加工ナイフの可能性も残している。7～9は剥片尖頭器である。7は打面転移しながら剥片剥離を行った石核から作出された縦長剥片を用い、8、9は連続的な縦長剥片剥離を行う中で作出された縦



第10図 B区旧石器時代遺物分布図（VI・VII層）（2）

長剥片を用いている。8の基部調整は右側縁のみである。9は両縁より抉りを作出する。10は連続的な剥離を行った石核より作出され、打点付近に小規模な剥離を集中させて成形を行った今峰型ナイフ形石器である。日東産黒曜石を用いている。11は連続的な縦長剥片剥離の際に作出された剥片の右側縁に連続的な剥離を施したスクレイパーである。12、13は連続的な剥片剥離を行う中で作出された頭部調整剥片である。14は円礫を分割し、分割面を打面として連続的な剥片剥離を行った後、打面と作業面を入れ替えて剥離した石核である。接合した剥片の打面に分割面を見ることができる。16は桑ノ木津留産の黒曜石である。角礫の角に打撃を行うが、剥片剥離を積極的に行ってはおらず、原礫段階で放棄している。



第 11 図 C 区縄文時代炉穴分布図

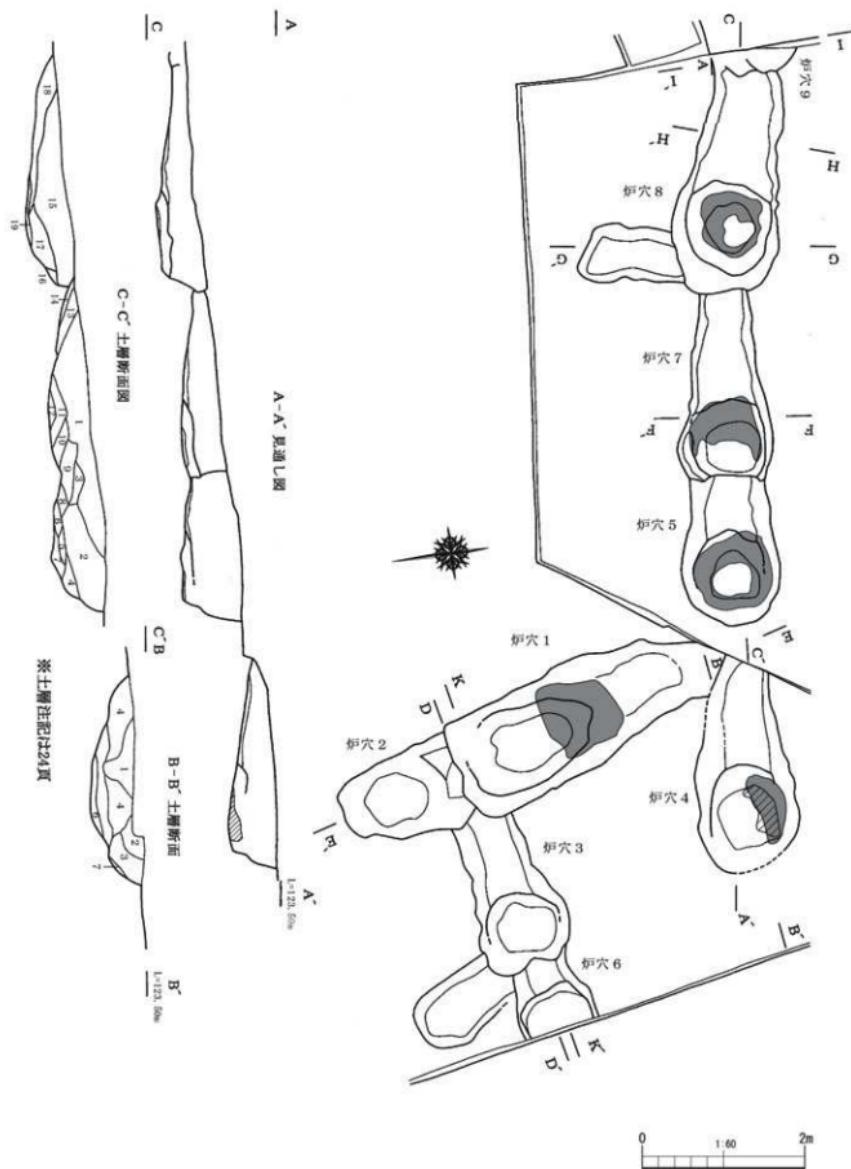
る。15 は不規則な剥片剥離を行った石核の平坦面を打面として数度にわたる剥片剥離を行った石核である。石核としては成形されているが、作出される剥片の大きさに問題があったからか、この段階で放棄されている。17、18 は連続的な縦長剥片剥離の過程で作出された剥片である。作出後に 2 次加工は行われない。なお 2 点とも頁岩であるが、出土遺物中に同一母岩の石材が存在しない。19 は連続的な縦長剥片剥離を行う工程により作出された剥片である。末端部に剥離痕があり、素材剥片ではなくこの状態でスクリーパーのように使用されたと考えられる。

20 は細石刃核である。流紋岩製であり、平坦面を作出後に側縁調整を行い、細石刃剥離を行うことから船野型に分類される。なお、側面調整剥片（21）が接合する。

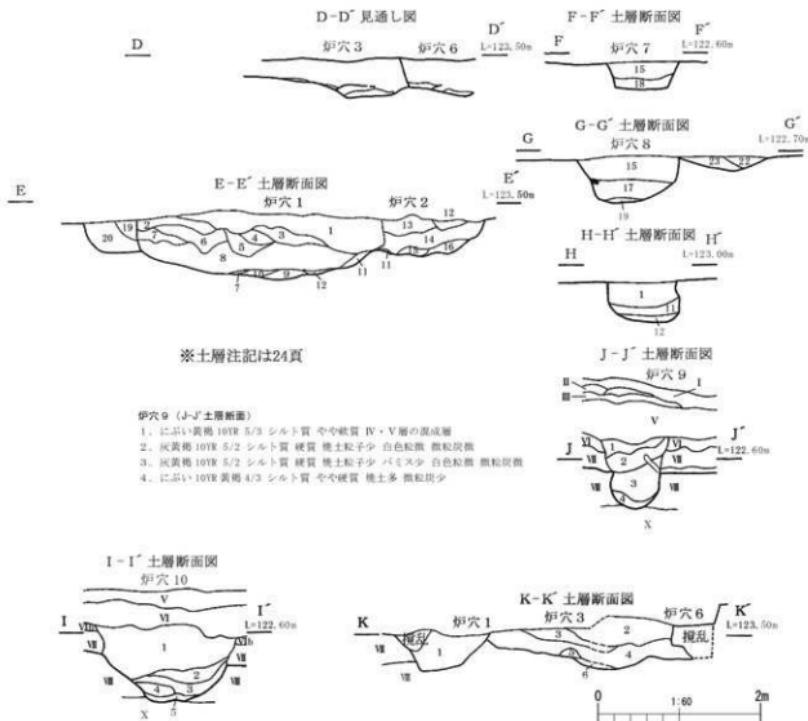
第 4 節 縄文時代

第 1 項 概要

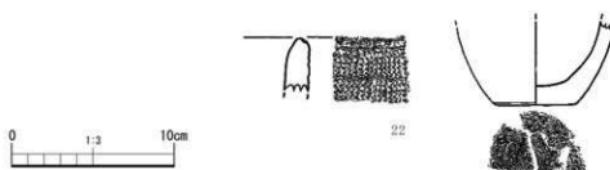
B 区は、表土剥ぎを行った時点では既に縄文時代の遺物包含層が露出し、また C 区は擾乱の影響を受けていた。分布図（第 20 図）の空白は、調査時点の削平状況を反映している。



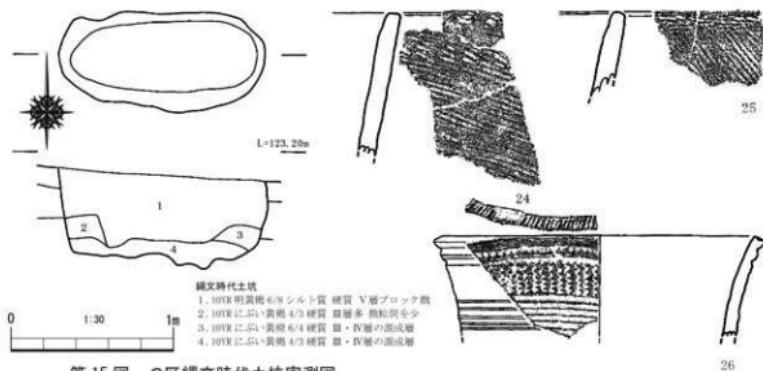
第12図 C区縄文時代炉穴実測図(1)



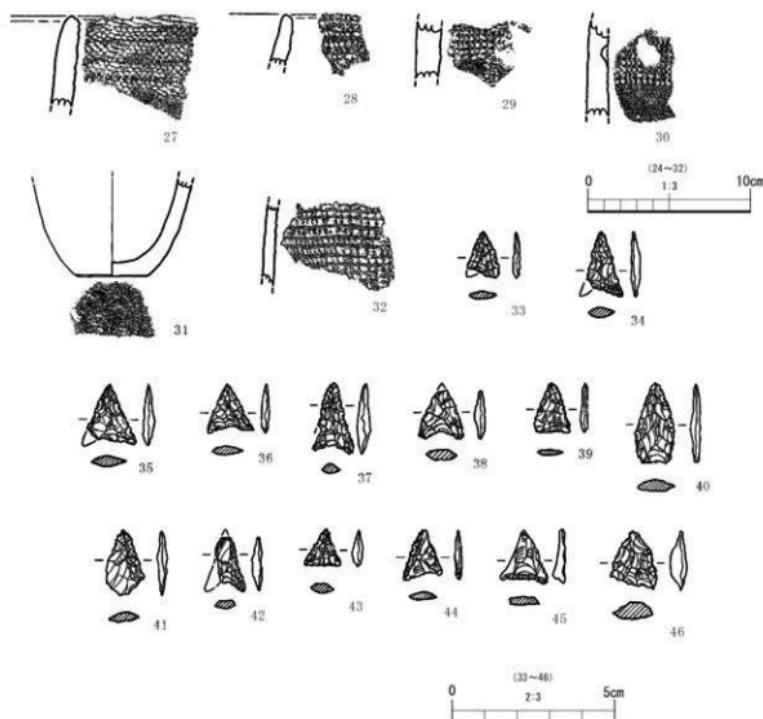
第 13 図 C 区縄文時代炉穴実測図 (2)



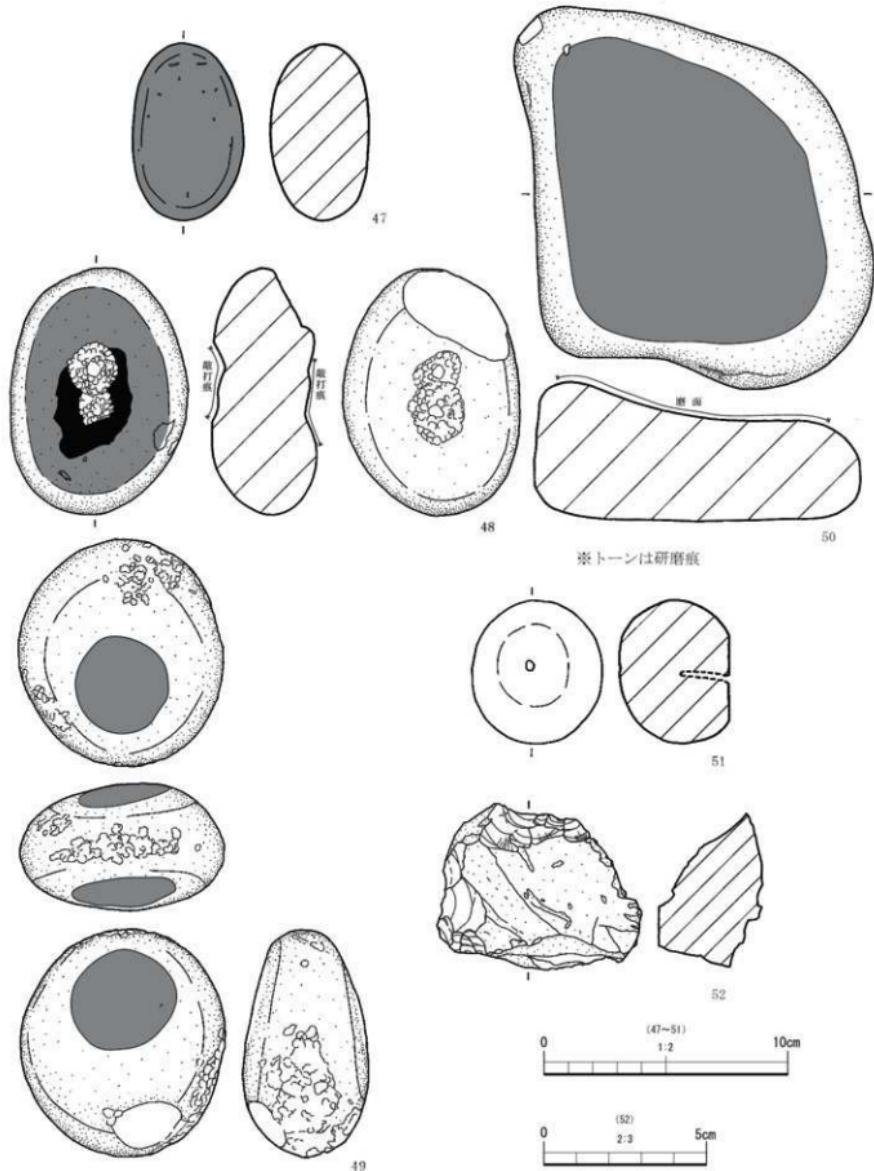
第 14 図 C 区縄文時代炉穴出土遺物



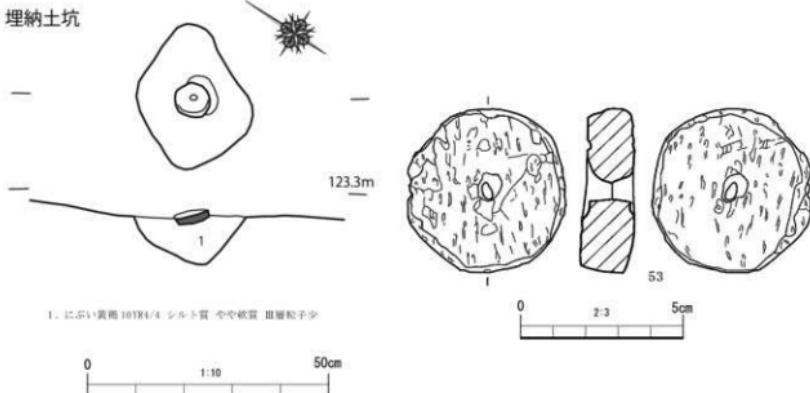
第15図 C区縄文時代土坑実測図



第16図 B・C区縄文時代出土遺物実測図（1）



第17図 B・C区縄文時代出土遺物実測図(2)



第18図 C区縄文時代埋納土坑実測図

第19図 C区縄文時代埋納土坑出土遺物実測図

第2項 検出遺構

1. 炉穴

10基検出した。全てC区北部である。

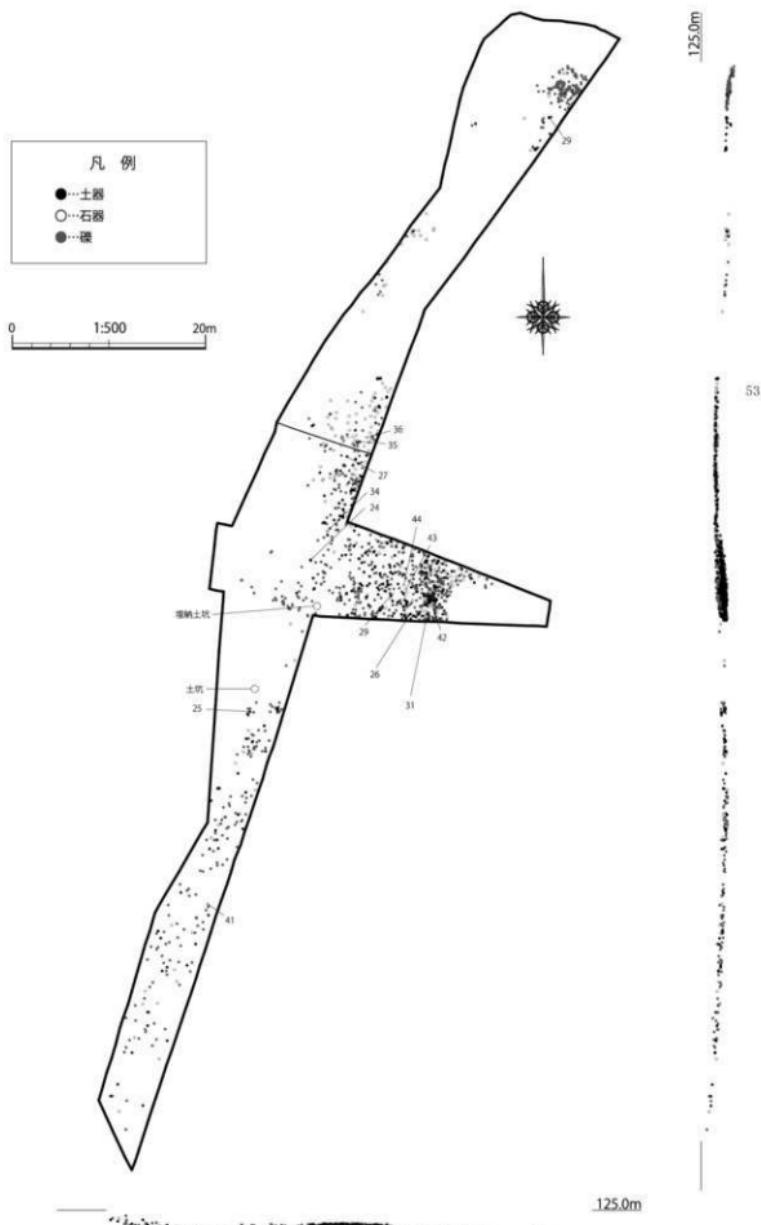
炉穴1は、焚口を北に向けて検出された。長軸3.3m、短軸約1.4mである。検出面からの深さ80cmと、本遺跡で確認された炉穴としては最大である。炉穴の天井部は確認できなかつたが、遺構底面は焼土が多量に堆積しており、それにより煙道の先端から焚口まで約2mあつたと推測される。また焼土以外に遺構底面から壁面にかけて熱による赤化が認められることから、高頻度で使用したことが窺える。

炉穴2は、炉穴1の北に隣接し、焚口を北に向けて検出された。長軸1.3m、短軸1.2mである。検出面からの深さは約40cmであり、焼土は埋土に微量、底面に少量確認した。炉穴の天井部は確認できなかつたが、おそらく炉穴1の天井崩落後に造られたと見られ、炉穴1の土層断面図の1層下面是、炉穴1埋没後に炉穴2の焚口になったと推測される。

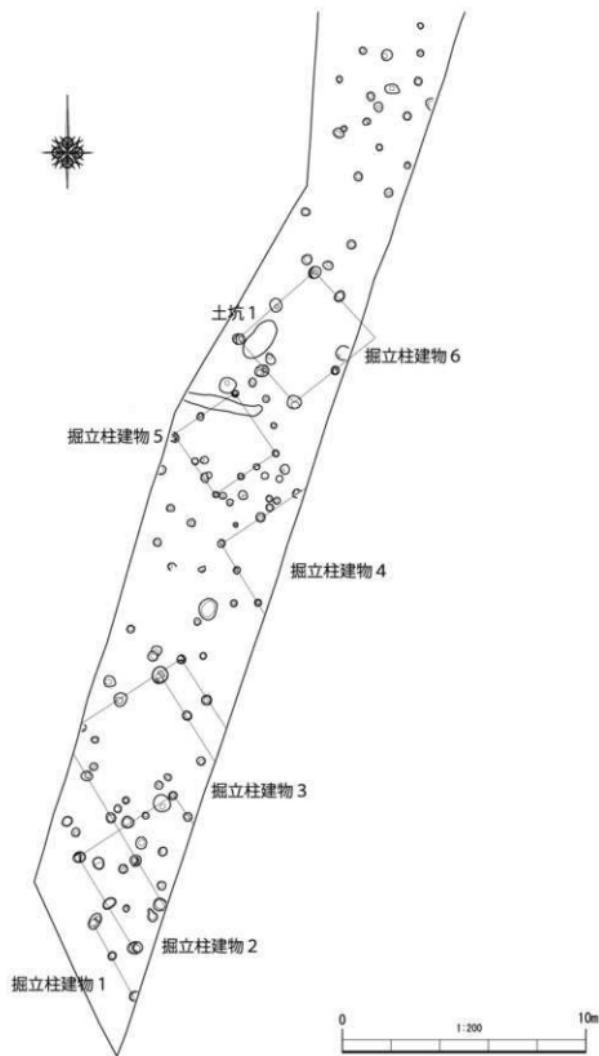
炉穴3は、焚口を西に向けて検出された。残存部の長軸は約2m、短軸は約1.2mである。遺構の末端部は炉穴1・2に重複しており、2基の炉穴の崩落後に構築されたと推測される。検出面からの深さは約60cmである。焼土は微量であった。

炉穴4は、焚口を北西に向けていた。遺構の末端は炉穴1と重なる。残存部の長軸は約2.2m、短軸は約1.1mである。検出面からの深さは約80cmである。焼土は底面において多量に確認された。

炉穴5は、焚口を北西に向けて検出された。残存部の長軸は約2m、短軸は約1.2mである。炉穴4とは図上では切りあわないものの、炉穴4との間には0.4mの段差があることから、本来は切りあっていたと考えられる。また末端部は炉穴7と切りあつており、炉穴7の崩落

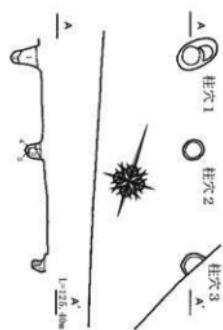


第 20 図 B・C 区縄文時代遺物分布図

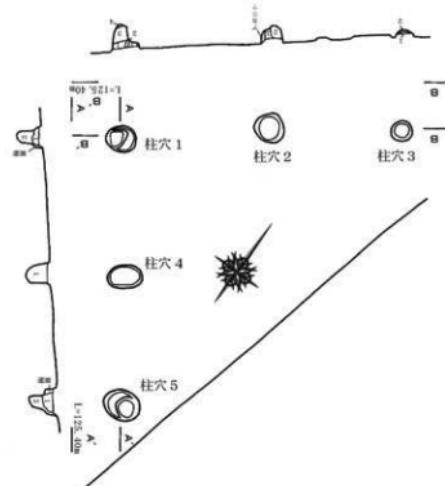


第21図 C区中世検出遺構配置図

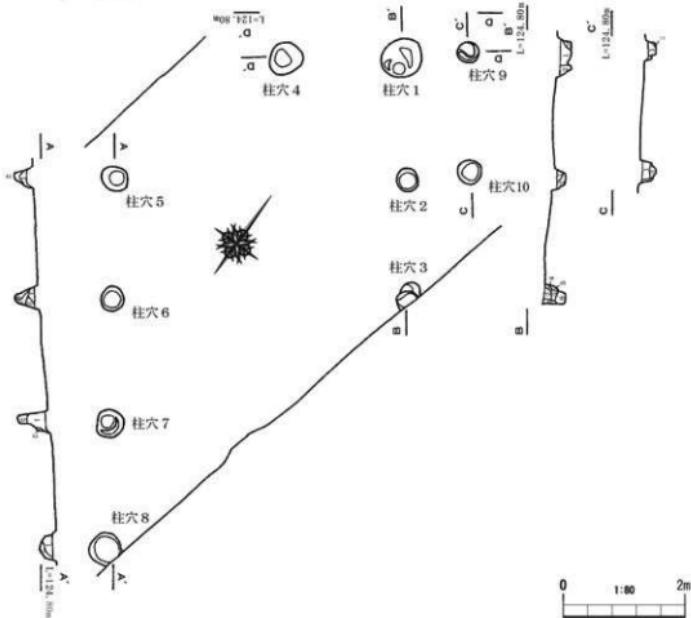
堀立柱建物 1



堀立柱建物 2

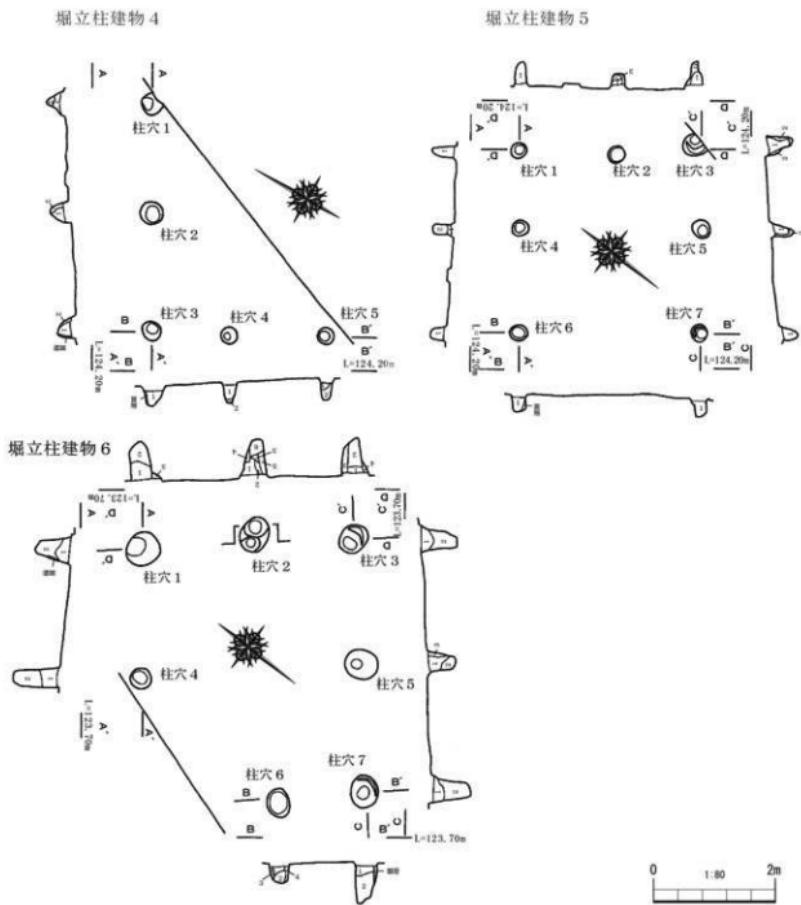


堀立柱建物 3



0 1m 2m

第22図 C区中世掘立柱建物実測図（1）



第23図 C区中世掘立柱建物実測図（2）

後に構築されたと推測される。焚口はほぼ垂直に近い角度で立ち上がり、埋土からは微粒炭が多く出土したほか、焚口の周囲は焼土が明確に認められた。

炉穴6は、焚口を西に向けて検出された。残存部の長軸は約0.9m、幅は約0.9mである。先端部が調査区境界部に接するほか、末端部は炉穴3と重複しており、炉穴3の埋没後に構築されたと推測される。焼土は微量であった。

炉穴7は、焚口を北西に向けて検出された。先端部は炉穴5に、末端部は炉穴8に接しており、残存部の長軸は約2.7m、幅は約1.1mである。焚口からは微粒炭、焼土共に多量に確認された。

伊穴 4 (B-B' 土層断面)

1. にぶい黄褐色 10YR5/4 シルト質 やや硬質
2. 明黄褐色 10YR6/6 シルト質 やや軟質 VI層ブロック少
3. にぶい黄褐色 10YR4/3 シルト質 硬質 V層子少 銀粒灰微
4. にぶい黄褐色 10YR4/3 シルト質 硬質 バミス多
5. 増粘土 SYR3/3 シルト質 硬質 地下土層 銀粒灰少
6. 明赤褐色 5YR6/5 シルト質 硬質 地下土層 銀粒灰微
7. 増粘土 SYR3/3 シルト質 やや硬質 VI層ブロック少

SP 5. - 7. (C-C' 土層断面)

1. 暗黄褐色 10YR8/2 シルト質 硬質 岩紋 バミス多 銀粒灰微
2. 黒褐色 10YR3/2 シルト質 硬質 岩紋 バミス少 銀粒灰微
3. にぶい黄褐色 10YR4/3 シルト質 硬質 バミス微 地下土層子少
4. 増粘土 SYR3/2 軟質土 やや硬質 地下土層 多銀粒灰少
5. 黑褐色 SYR6/6 軟質土 硬質 地下土層 多
6. 黑褐色 SYR3/1 シルト質 やや硬質 灰化物極めて多 地下土層子多
7. 増粘土 5YR6/6 軟質土 硬質 地下土層
8. 增粘土 5YR6/2 シルト質 硬質 地下土層子多 銀粒灰少
9. 増粘土 5YR3/5 シルト質 硬質 地下土層ブロック少 バミス微
10. 黑褐色 5YR3/2 シルト質 硬質 灰化物極めて多 地下土層子微
11. 増粘土 5YR4/3 シルト質 硬質 地下土層子微
12. 增粘土 5YR6/6 軟質土 やや硬質 地下土層極めて多
13. にぶい黄褐色 10YR4/3 軟質土 硬質 地下土層子多 銀粒灰微
14. 暗黄褐色 10YR4/2 シルト質 硬質 地下土層子少
15. にぶい黄褐色 10YR4/3 シルト質 硬質 岩紋 バミス多 地下土層子微 銀粒灰微
16. 増粘土 5YR6/6 軟質土 硬質 地下土層極めて多
17. 黑褐色 10YR3/2 軟質土 硬質 地下土層子多 灰色土層子微 銀粒灰少
18. 増粘土 5YR4/4 軟質土 硬質 銀粒灰少 地下土層子多
19. 明褐色 5YR5/6 軟質土 硬質 増粘土ブロック極めて多

伊穴 1 - 2 (E-E' 土層断面)

1. 増粘土 10YR3/4 シルト質 やや軟質 VI層ブロック極めて多 銀粒灰多
2. 暗褐色 10YR4/6 シルト質 細質 岩紋 多 バミス微
3. 暗褐色 10YR4/6 シルト質 細質 岩紋 VI層ブロック多
4. 暗褐色 10YR4/4 シルト質 やや硬質 VI層ブロック多 バミス少
5. 増粘土 10YR3/4 シルト質 やや硬質 岩紋 バミス微
6. 暗褐色 10YR4/4 シルト質 やや硬質 VI層ブロック多
7. 暗褐色 10YR4/4 シルト質 やや硬質 VI層ブロック少 銀粒灰微
8. 増粘土 5YR7/4 シルト質 硬質 地下土層極めて多 地下土層子少
9. にぶい暗褐色 5YR7/4 シルト質 硬質 地下土層
10. 増粘土 5YR8/4 シルト質 硬質 地下土層 多
11. にぶい黄色褐色 10YR5/4 シルト質 硬質
12. 暗褐色 10YR4/4 シルト質 やや硬質 VI層ブロック少 銀粒灰微
13. 増粘土 10YR3/4 シルト質 やや硬質 VI層ブロック少 銀粒灰微
14. 増粘土 10YR2/4 シルト質 やや硬質 地下土層極めて多 地下土層少
15. 黑褐色 7. 5YR2/2 シルト質 硬質 地下土層極めて多 地下土層少
16. 増粘土 10YR3/4 シルト質 硬質 地下土層極めて多 銀粒灰少
17. 黑褐色 5YR3/1 シルト質 硬質 地下土層極めて多 銀粒灰多
18. 暗褐色 5YR8/4 シルト質 硬質 地下土層極めて多
19. 黑褐色 10YR3/2 シルト質 硬質 VI層ブロック多 地下土層少 銀粒灰微
20. 増粘土 10YR3/3 シルト質 硬質 地下土層

柱穴 2

1. 黄褐色 10YR5/6 シルト質 硬質 スコリア少 銀粒灰微
2. 増粘土 10YR3/4 シルト質 やや硬質 VI層ブロック多 スコリア多
3. 増粘土 10YR3/4 シルト質 やや硬質 VI層子多
4. 暗褐色 10YR4/6 砂質 やや軟質 VI層子多

柱穴 3

1. 増粘土 10YR3/4 シルト質 やや硬質 VI層子多
2. 増粘土 10YR3/4 シルト質 やや硬質 VI層子多 スコリア無

孤立柱建物 2

柱穴 1

1. 増粘土 10YR3/4 シルト質 硬質 銀粒灰微 スコリア多 VI層子多
2. 黄褐色 10YR5/6 シルト質 やや軟質 VI層子少
3. 増粘土 10YR3/4 シルト質 やや硬質 VI層ブロック多
4. 暗褐色 10YR4/6 シルト質 やや硬質

柱穴 2

1. 増粘土 10YR3/4 シルト質 硬質 VI層子多
2. 增粘土 10YR3/4 シルト質 硬質 VI層子極めて多 スコリア少

柱穴 3

1. 增粘土 10YR3/4 シルト質 硬質 VI層子多
2. 暗褐色 10YR4/6 砂質 硬質 VI層子多

柱穴 4

1. 増粘土 10YR3/4 シルト質 硬質 スコリア多 VI層ブロック少 銀粒灰微
2. 增粘土 10YR3/3 シルト質 やや硬質 VI層子多 スコリア少

柱穴 5

1. 増粘土 10YR3/4 シルト質 硬質 VI層子多
2. 増粘土 10YR3/4 シルト質 硬質 VI層子多 スコリア多

柱穴 2

1. 増粘土 10YR3/4 シルト質 硬質 VI層子極めて多 スコリア多 銀粒灰微
2. 増粘土 10YR4/6 シルト質 硬質 VI層子極めて多

柱穴 3

1. 増粘土 10YR3/3 シルト質 やや硬質 VI層ブロック多 スコリア少
2. 暗褐色 10YR2/3 シルト質 硬質 VI層ブロック極めて多
3. 黑褐色 10YR4/4 シルト質 硬質 VI層子少 スコリア少
4. 暗褐色 10YR4/4 シルト質 硬質 VI層子少
5. 増粘土 10YR3/4 シルト質 硬質 VI層子少
6. 増粘土 10YR3/4 シルト質 硬質 VI層子少

柱穴 4

1. 黑褐色 10YR2/4 シルト質 硬質 VI層ブロック多 スコリア多
2. 増粘土 10YR3/4 シルト質 やや硬質 VI層子多

柱穴 5

1. 増粘土 10YR3/4 シルト質 硬質 VI層子極めて多 スコリア少
2. 暗褐色 5YR4/4 シルト質 硬質 VI層子多

柱穴 6

1. 墓褐色 10YR3/3 砂質 やや軟質 ■層粒子極めて多
2. 黒褐色 10YR4/6 砂質 やや硬質 スコリア少 ■層極めて多
3. 墓褐色 10YR3/4 砂質 やや硬質 スコリア少 ■層粒子多
4. 黑褐色 10YR4/4 砂質 硬質 ■層ブロック極めて多スコリア少

柱穴 7

1. 黑褐色 10YR4/6 砂質 やや軟質 ■層粒子多 スコリア少微粒灰少
2. 黑褐色 10YR2/3 シルト質 やや硬質 ■層粒子少
3. 墓褐色 10YR3/4 シルト質 軟質 ■層粒子多 スコリア少

柱穴 8

1. 黑褐色 10YR4/6 砂質 やや軟質 ■層粒子多 スコリア少 微粒灰微
2. 墓褐色 10YR3/4 砂質 やや硬質 ■層粒子多 スコリア少

柱穴 9

1. 墓褐色 10YR3/4 砂質 軟質 ■層粒子多 スコリア多
2. 黑褐色 10YR4/4 砂質 軟質 ■層多

柱穴 10

1. 墓褐色 10YR3/4 砂質 やや軟質 ■層極めて多 スコリア多
2. 墓褐色 10YR3/3 砂質 やや軟質 ■層粒子多 スコリア少

直立柱建物 4

柱穴 1

1. 墓褐色 7.5YR3/4 砂質 やや硬質 ■層ブロック極めて多 スコリア少
2. 墓褐色 10YR3/4 シルト質 やや軟質 ■層ブロック少 スコリア多

柱穴 2

1. 墓褐色 10YR3/4 砂質 やや軟質 ■層ブロック多 スコリア少
2. 黑褐色 10YR4/4 砂質 やや軟質 ■層粒子多

柱穴 3

1. 墓褐色 10YR3/4 シルト質 硬質 スコリア多 ■層ブロック少微粒灰微
2. 墓褐色 10YR3/4 砂質 軟質 ■層ブロック多

柱穴 4

1. 墓褐色 10YR3/4 シルト質 やや軟質 ■層粒子多 微粒灰少 スコリア多
2. 黑褐色 10YR5/8 シルト質 硬質

柱穴 5

1. 墓褐色 10YR3/4 シルト質 やや軟質 スコリア少 ■層粒子少 微粒灰微
2. 墓褐色 7.5YR3/4 砂質 軟質 ■層ブロック多 スコリア少

直立柱建物 5

柱穴 1

1. 墓褐色 10YR3/4 シルト質 やや軟質 ■層ブロック少 スコリア少

柱穴 2

1. 黑褐色 10YR4/4 シルト質 やや軟質 スコリア多
2. 墓褐色 10YR3/4 シルト質 軟質 スコリア多
3. 墓褐色 10YR3/4 砂質 軟質 ■層ブロック多

柱穴 3

1. 墓褐色 10YR3/4 シルト質 硬質 スコリア少 ■層粒子少
2. 黑褐色 10YR4/4 シルト質 やや軟質 ■層ブロック多

柱穴 4

1. 墓褐色 10YR3/4 砂質 やや軟質 スコリア少 ■層ブロック多
2. 墓褐色 10YR3/4 シルト質 軟質 スコリア少

柱穴 5

1. 墓褐色 10YR3/4 砂質 硬質 ■層ブロック多 スコリア多
2. 墓褐色 10YR4/6 砂質 軟質 ■層粒子少

柱穴 6

1. 墓褐色 10YR3/4 砂質 硬質 ■層ブロック多 スコリア多

柱穴 7

1. 黑褐色 10YR4/4 シルト質 やや硬質 ■層ブロック少 スコリア多

直立柱建物 6

柱穴 1

1. にぶい黄褐色 10YR5/3 シルト質 やや軟質 スコリア多 ■層粒子を少 白粘土粒子微
2. にぶい黄褐色 10YR6/3 シルト質 やや軟質 スコリア少 ■層粒子少
3. 明黄色 10YR6/6 砂質 軟質 ■層粒子極めて多

柱穴 2

1. にぶい黄褐色 10YR5/3 シルト質 やや軟質 スコリア多 ■層粒子少 微粒灰少
2. にぶい黄褐色 10YR5/4 砂質 やや軟質 ■層粒子多 スコリア少
3. にぶい黄褐色 10YR6/4 砂質 軟質 ■層ブロック極めて多 スコリア少
4. 明黄色 10YR6/6 砂質 軟質 ■層ブロック極めて多 スコリア少
5. にぶい黄褐色 10YR6/4 シルト質 やや軟質 ■層粒子少

柱穴 3

1. にぶい黄褐色 10YR5/2 砂質 やや軟質 ■層粒子多 スコリア多 ■層粒子少
2. にぶい黄褐色 10YR4/2 シルト質 やや軟質 ■層粒子少 スコリア多 ■層粒子少
3. にぶい黄褐色 10YR5/4 砂質 軟質 ■層粒子極めて多
4. 明黄色 10YR6/6 砂質 軟質 ■層ブロック極めて多

柱穴 4

1. にぶい黄褐色 10YR4/2 シルト質 やや軟質 ■層白粘土粘土多 スコリア多 ■層粒子少
2. にぶい黄褐色 10YR4/3 シルト質 やや軟質 スコリア少

柱穴 5

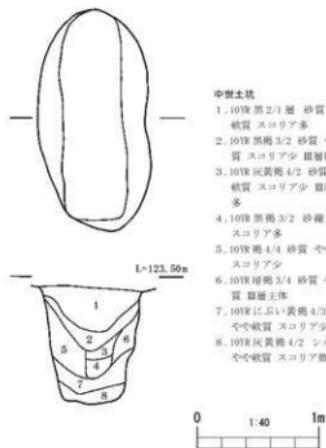
1. にぶい黄褐色 10YR4/3 シルト質 やや軟質 スコリア多 ■層粒子少
2. にぶい黄褐色 10YR4/4 シルト質 やや軟質 スコリア少 ■層ブロック少
3. 明黄色 10YR6/6 砂質 軟質 ■層ブロック極めて多
4. にぶい黄褐色 10YR4/3 砂質 やや軟質 ■層粒子多 スコリア少

柱穴 6

1. 10YR3/3 シルト質 やや軟質 スコリア多 ■層粒子少
2. 墓褐色 10YR3/3 砂質 やや軟質 スコリア多 ■層ブロック多
3. 明黄色 10YR6/6 砂質 軟質 ■層粒子極めて多
4. にぶい黄褐色 10YR4/3 砂質 やや軟質 ■層ブロック多

柱穴 7

1. 墓褐色 10YR3/4 シルト質 硬質 スコリア多 ■層粒子少
2. にぶい黄褐色 10YR4/3 砂質 やや軟質 ■層ブロック多 ■層白粘土粒子少



第24図 C区中世土坑実測図

または別府原式の底部に相当する。

2. 土坑

1 基検出した。

土坑1はC区北側で検出した。1.20m×0.55mの楕円形を呈する。埋土にはアカホヤ火山灰(Ⅱ層)が一様に認められる。高原スコリアは含まない。アカホヤ降灰後暫らくの間に構築されたと推測される。

3. 埋納土坑

C区突出部の南端において、IV層上面の検出作業中に小規模の土坑と軽石製の石製品を確認した。土坑は長軸約30cm、短軸約25cm、深さ約15cmであり、断面はロート状である。軽

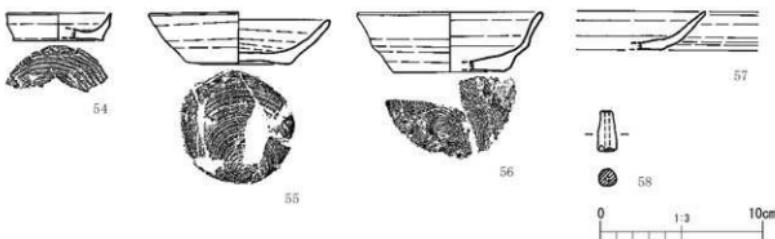
炉穴8は、焚口を北西に向けて検出された。先端部は炉穴7に、末端部は炉穴9に接するが、残存部の長軸約3m、短軸は約1.3mである。焚口は斜めに立ち上がり、周囲には焼土が多い量に確認された。

炉穴9は、一部のみの残存であったが、焼土が確認されたため炉穴と判断した。遺構の方向や大きさは不明である。

炉穴10は炉穴9が確認された壁面の約5m南から検出された。一部のみの残存であったが、焼土が確認されたため炉穴と判断した。遺構の方向や大きさは不明である。

なお、炉穴1、炉穴3、炉穴4、炉穴5、炉穴7、炉穴8では放射性炭素年代測定を行った。

22、23は炉穴内の出土遺物である。どちらも炉穴5の焚口から出土した。22は中原II式、23は底部外面のケズリから中原II式、



第25図 C区中世出土遺物実測図

石製の石製品は埋土上部、検出面付近から出土した。埋土にはⅢ層のブロックが含まれることから、アカホヤ火山灰降灰後に構築されたと考えられる。

第3項 出土遺物

24～32は土器である。23、24は別府原式である。26、31は吉田式、27、29、30は中原Ⅱ式である。28は下剣峰式と考えられる。32は外面にケズリを伴う底部であり、別府原式と中原Ⅱ式のどちらかと考えられる。33～52は石器である。33～46は石鎚である。完成品は33～39であり、小型で抉りが浅く、いわゆる三角鎚に近い形状を意識して成形を行つたと推測される。石材は桑ノ木津留産が殆どである。47、49は、中央の平坦面に研磨痕が認められる。50は比較的小型ではあるが中央に摩滅が見られることから石皿として使用したと考えられる。48は研磨痕に加えて凹みが認められることから凹石と考えられる。51はコンクリーションであり、使用痕は認められないが、縄文時代に集落内に持ち込まれたと考えられる。52は比較的大型の桑ノ木津留産黒曜石の原礫である。

第5節 中世

第1項 概要

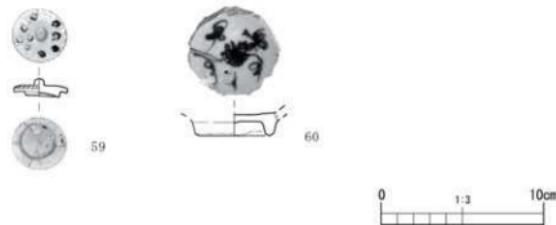
C区南部の斜面上にピット群を確認した。これらは柱穴と考えられる。また掘立柱建物を想定できる配置が見られた。埋土には高原スコリアが認められたことや、柱穴からは糸切底を持つ土師器の小片が出土した事から埋没時期は中世と考えられる。このほか、同じ埋土を持つ遺構として土坑も検出されている。

第2項 検出遺構

1. 掘立柱建物

6基検出した。

掘立柱建物1は、掘立柱建物群の中でも最も南、径30cmの柱穴が3基並ぶ状態で検出した。これに対応する柱穴は認められなかったが、調査区外に存在する可能性が考えられることから、掘立柱建物として判断した。



第26図 C区近世出土遺物実測図

掘立柱建物 2 は、掘立柱建物 1 に隣接するように検出した。片方の軸は 2 間と考えられるが、東側は調査区の外側に当たるため規模は定かでない。

掘立柱建物 3 は、掘立柱建物 2 と一部重複して検出した。調査区の制約で規模は定かでないが、確認できる範囲では 2 間 × 4 間、更に東側に伸びる可能性を残している。柱穴の径は約 40 cm と、その他の掘立柱建物より比較的大きい。なお、長辺に沿って庇柱も検出した。

掘立柱建物 4 は、調査区外に伸びると思われ、規模は定かでないが、確認できる範囲では 2 間 × 2 間である。柱穴の径は 15 ~ 20 cm と比較的小さい。

掘立柱建物 5 は、掘立柱建物 4 に隣接するように検出した。多くの掘立柱建物が調査区の制約で規模が不明確の中、この掘立柱建物は 2 間 × 2 間と規模が判明している。柱穴の径は 15 ~ 20 cm と比較的小さい。

掘立柱建物 6 は、掘立柱建物 5 に隣接するように検出した。規模は 2 間 × 2 間、柱穴は径約 50 cm と比較的大きい。

2. 土坑

検出は 1 基のみである。土坑 1 は、掘立柱建物 6 に重複して検出した。1.4m × 0.6m の楕円形を呈し、深さは 1.3m であり、底面からほぼ垂直に近い角度で立ち上がり、埋土は黒色土で 5 mm 大の高原スコリアを多く含んでいた。埋土から遺物は確認されなかった。

第 3 項 出土遺物

1 ~ 4 は土師器である。1、4 は皿である。2、3 は壺である。3 は内外面に大きな歪みが認められる。1 ~ 4 は底面に糸切外し痕が認められる。

第 6 節 近世

B・C 区内から近世の遺構は検出されなかった。ただ C 区は道路に伴う造成が行われており、その造成土中より近世に相当する遺物が出土したのでここで紹介する。

59・60 共に染付である。59 は菊花文の小型の蓋である。60 は碗の底部である。

第3章 A区の調査

第1節 調査の概要

A区は本永寺原北東の辺縁部に設定した、7m×45mの調査区である。調査区内は、上段・中段・下段の3つの段があり、最も高い上段と中段とでは約2m、中段と最も低い下段では約50cmの標高差がある。この段差は、西から東に向かう勾配を整地した結果であることが調査を通して明らかとなった。

第2節 層序

A区西側の土層堆積はB区と同じであり、I層：表土（耕作土）、III層：黄褐色砂質土（アカホヤ火山灰）、IV層：暗褐色硬化シルト質土（牛ノスネローム層）、V層：褐色シルト質土（縄文時代早期）、VI層：暗褐色硬化シルト質土（霧島小林軽石）、VII層：褐色シルト質土、VIII層：暗褐色硬化シルト質土、IX層：黄褐色硬化砂質土（姶良丹沢火山灰）である。IX層の大部分は2次堆積層であり、A区中央に2m近く掘り下げてもプライマリーなIX層を確認できなかった。その原因是、B区をはじめ台地西部に降灰した姶良丹沢火山灰が標高の低い東へ流下した結果と推測される。

第3節 縄文時代

縄文時代の遺物は上段よりV層から確認された。遺構はなく、遺物が約20点、焼礫が約30点出土した。土器は小片、石器は黒曜石の剥片のみであり図示可能な遺物はない。土器型式も不明だが、出土層位から早期の可能性が高い。

第4節 近世以降

第1項 概要

近世以降の遺構は調査区の全面から確認された。検出された遺構はピット群、石囲遺構、石壙、土坑、井戸であり、調査区内を整地した痕跡も認められた。また遺物の一括廃棄も確認され、瓦や陶器などが大量に出土した。

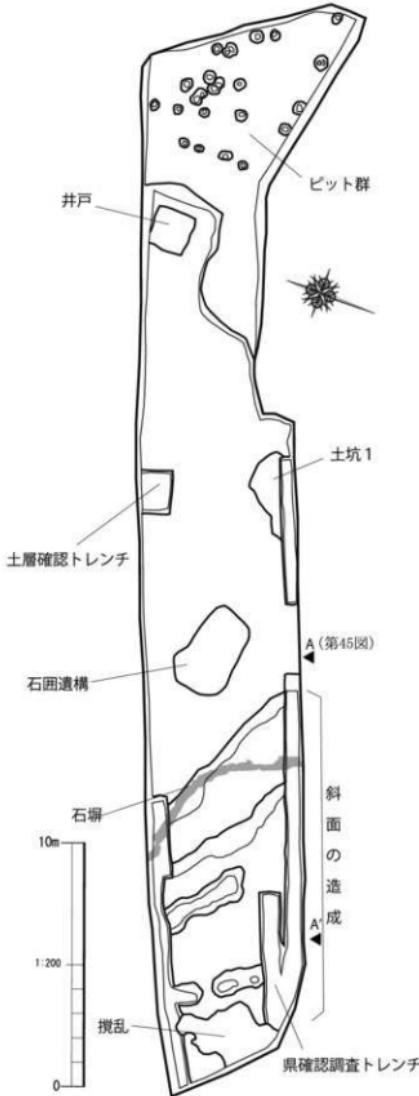
第2項 検出遺構

1. ピット群

上段より、III層上面で検出された。計23基である。径30cm、深さ30～60cmである。掘立柱建物群の柱穴である可能性が高いと考えられるものの、調査面積の制約もあり規則的な配列は確認できなかった。検出面はIII層、柱穴中からの遺物の出土はなかった。近接する本永寺に関連した掘立柱建物に伴う柱穴と推測される。

2. 石囲遺構

中段や西側より、方形の石積みを行った遺構を確認した。長軸約3.5m、短軸約2.5m、深さ約50cmで、遺構の外縁に礫を2～3段積み、積んだ石の内側を20cmほど掘り下げている。遺構底面はIX層であり、石敷き等は認められなかった。用いられた大型の円礫の多くは分割され、分割面を内側に向けて配される。これは内側を方形に揃えるため



第 27 図 A 区遺構配置図

と推測される。礫の内側は燃焼に伴う黒い変色が認められる。そのため遺構内は火を用いた可能性が考えられるが、遺構埋土から確認された微粒炭はごく僅かであり、遺構底面にも、熱による変色は認められなかった。

61～64は埋土中の遺物である。図示できるものは瓦のみであり、いずれも近世に相当する。なお63は断面が平瓦より湾曲しており飾り瓦の一種と考えられる。

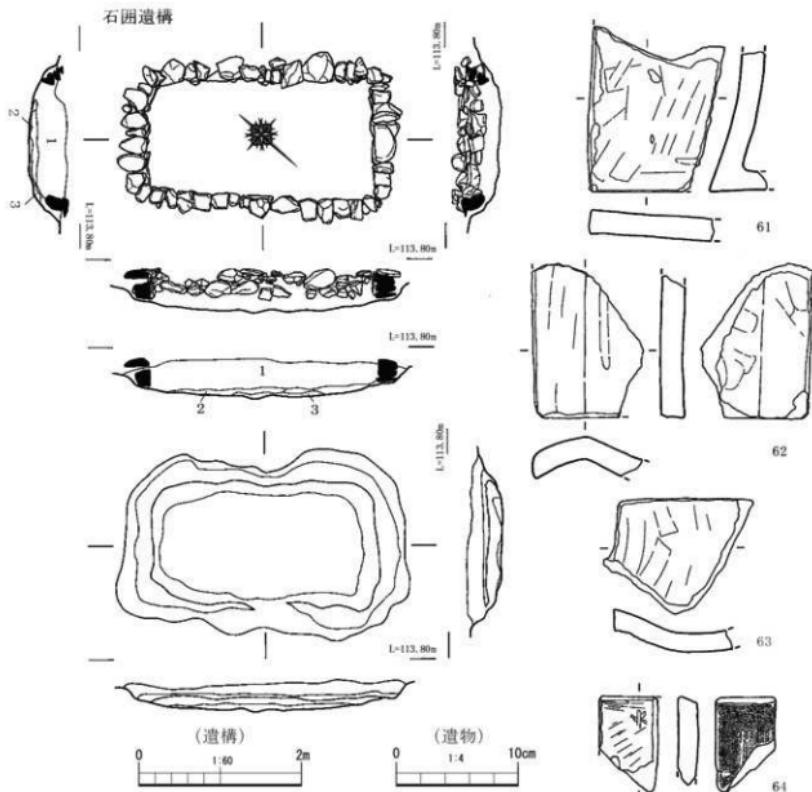
3. 土坑

土坑1はA区中央の北壁で検出した。検出部分は3m×2.5mの不定形な土坑であり、壁面や底面を観察すると、小規模な掘削と埋没が繰り返された痕跡と推測される。

4. 石塀

下段と中段の境界で検出された、長さ約1m、幅約0.3m、奥行約0.2mの直方体の切石を1列に積み上げている。石塀の切石は破碎（割れたものもあり）した切石を用い、隙間には円礫も使っている。これは、遺構のカーブに対応するためと推測される。ちなみに、石塀は調査区外では、直線的にのびることが確認されている。

石塀を取り除くと、その下から一括廃棄された多量の遺物が確認された。これは、一括廃棄の後にこの石塀が構築されたことを明らかにしている。

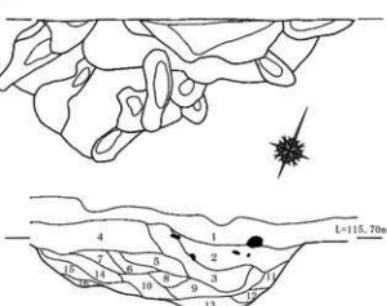


石圓遺構

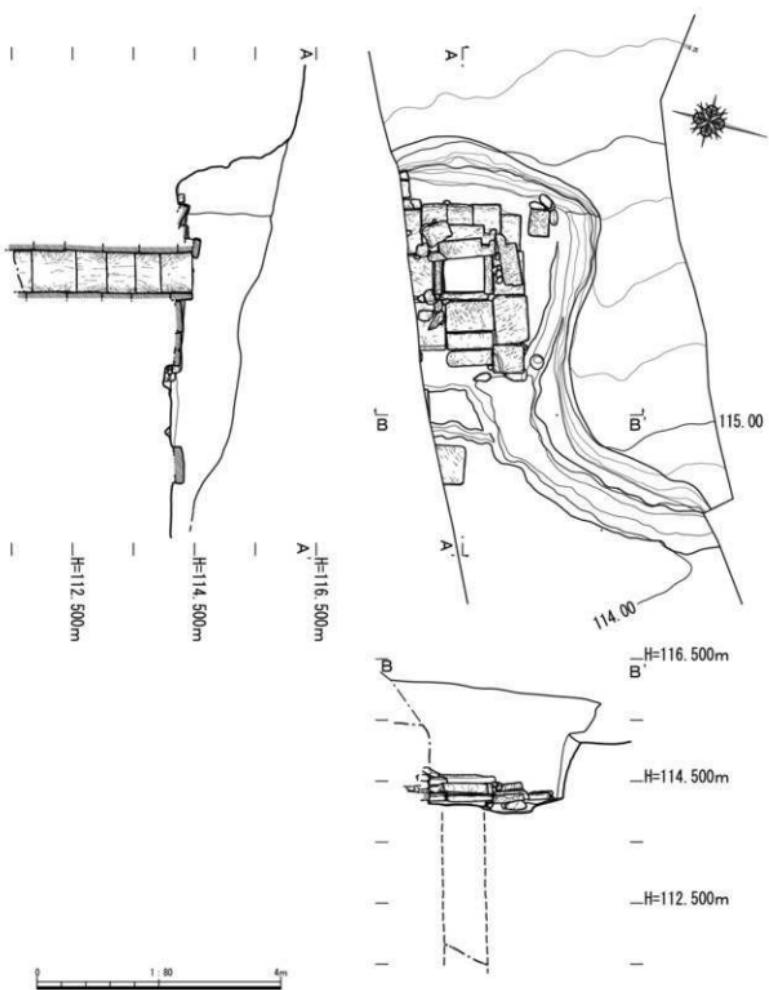
1. 淡褐色 10YR4/3 シルト質 硬質 壓密 ロック少
2. 暗黄色 10YR4/2 シルト質 中や軟質 機械混雜
3. 淡褐色 10YR3/2 シルト質 やや硬質 残存粒子少 微粒混少
4. 淡褐色 10YR3/4 シルト質 中や硬質 壓密 壓縮少
5. 淡褐色 10YR4/4 シルト質 中や硬質 壓密 砂粒少
6. 淡褐色 10YR5/4 シルト質 中や軟質 内縫少 粒子粗 破壊少
7. 淡褐色 10YR3/4 シルト質 中や硬質 壓密 壓縮少

8. 黄褐色 7.5YR4/4 シルト質 中や軟質 地土混雜 砂粒少 砂利少
9. 淡褐色 10YR3/4 シルト質 中や硬質 壓密材の破壊あり 砂利少
10. 明灰色 2.5YR5/2 シルト質 中や軟質 淡白色多 砂粒混少
11. 暗黄褐色 10YR4/2 シルト質 中や軟質 機械混雜多
12. 淡褐色 10YR4/3 シルト質 中や軟質 機械混雜
13. 黑褐色 10YR3/2 シルト質 中や軟質 機械混雜多
14. 淡褐色 10YR4/4 シルト質 中や軟質 壓密 ブロック多
15. 黄褐色 10YR7/8 シルト質 中や軟質 残存ブロック多
16. 淡褐色 10YR5/4 シルト質 中や軟質 壓密 砂粒少

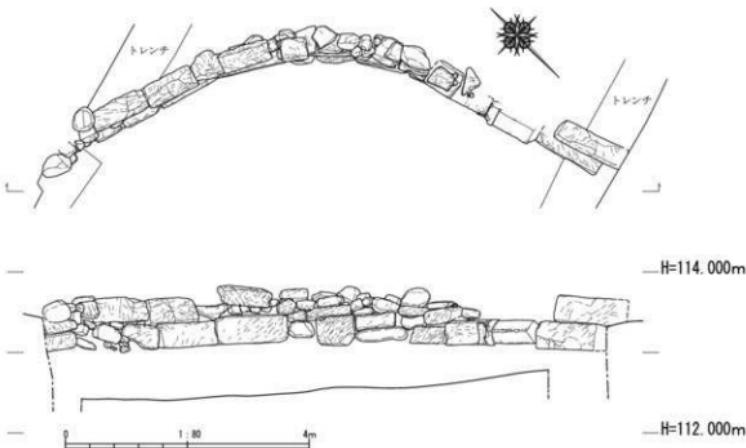
土坑 1



第28図 A区近世遺構及び出土遺物実測図



第29図 A区近世井戸実測図



第30図 A区石塙実測図

5. 井戸

発掘調査前、中段と上段の段差には坂道になった農道が存在していた。表土剥ぎ後、この農道には段を削り貰ったように擾乱坑が検出され、人力で掘削したところ、検出面の約1.5m下から凝灰岩の切石を用いた井戸を確認した。調査後地元の住民から、井戸は最近まで放置され、1990年代後半に埋めたとの情報を得た。

井戸は深さ2.7mまで開口し、途中で埋まっていた。井戸枠には長さ約1m、幅0.75m、厚さ0.05mの、凝灰岩の薄い切石を正方形に組んで積み上げていた。井戸枠の周りには、長さ約60cm、幅約25cm、厚さ10cm未満の切石を用いて、長さ約1.7m×3m石敷きを設けていた。この石敷きは井戸の東側を中心としており、井戸の西側は段を削り貰った壁が迫っているため、切石を一列横に並べたのみである。また、井戸枠の西側は石敷きが傾いていた。

石敷きを除去すると、井戸の掘り方を検出した。平面形は1辺1.3mの方形であり、垂直に掘り込まれていた。この内側に薄い切石を組んだ後、外側に土を充填して固める作業を行い、これを繰り返して積み上げたと推測される。地表面上まで組んだ後、最上段に幅広く、両端に鉤状の突出部を持つ板石を組み合わせたと考えられるが、発見時それらは取り外され、うち幾つかは井戸の周りに散乱していた。また、石敷きを除去した下には井戸枠から北東に向かって、長さ約4m、幅約0.7m、深さ約0.15mの溝が検出された。溝の延長上には台地に隣接した崖があり、井戸から汲み上げた水を台地下に流す意図で構築されたと推測される。



第31図 A区廃棄遺構遺物集中区図

ており、儀礼用と考えられる。68は口縁端部が外反する端反碗である。70は外面に綾杉状の文様が描かれる。74、75、78には内面底部に蒟蒻印判が認められる。76は高台が高く体部が直線的に外に開くことから近世後期に流行した広東碗である。78、79は外面に青磁質の釉薬を使い、内面に染付の文様を用いている。80～82は幕末に多い筒碗である。83～85・87、89は幕末に流行した端反碗である。93～96は陶器であり、茶の湯等で用いられたと考えられる。97は器表面の色調と外面の底部付近の千鳥文から薩摩焼（白薩摩）と考えられる。101は底面の成形から萩焼であり、104は黒、赤の釉薬で彩色されていることから色絵である。106～109、112、113は輸入系であり、107は青花、108は器面に残る痕跡から漳州窯と推測される。109、112、113は清代の白磁と考えられ、薩摩藩經由で入手したと推測されるが、110、111は底部の断面形が若干異なることから、模倣した国内産の可能性がある。114～117は碗の蓋である。116、117は上面が青磁質、下面が染付であり、78、79に対応する蓋と考えられる。118、119は鉢の蓋であり、119には色絵が施される。120は小杯、121～123は蕷麦猪口である。124、125は鉢に分類した。126は瑠璃色を呈しており、127、129、130は輪花皿である。128、131～134は皿類である。132は大皿に該当するものであり、134は隅丸方形を呈する大皿の蓋と考えられる。135、

井戸は上段と中段の境界にある約2mの段に接しており、井戸の周囲は垂直に近い角度で掘り込まれていた。そのため、井戸は中央部に平坦面を設けるための整地を行い、段を設けた後に構築されたと推測される。

6. 廃棄遺構

A区中段、石塀の下から検出した。多量の陶磁器と瓦が主体である。出土した状況は写真図版遺物集中部は第31図に示した。遺物の分布は傾向があり、瓦類は第31図の①から圧倒的に出土する一方、陶磁器類は②を中心としており、③④は②より疎らではあるが陶磁器が中心であり、瓦類は小片のみであった。陶磁器は割れた状態で出土するものが大部分を占めていた。

なお65～165は出土遺物である。65～75は染付の碗である。

67は外面に「寿」の字が描かれ



第32図 A区廃棄遺構出土遺物実測図(1)



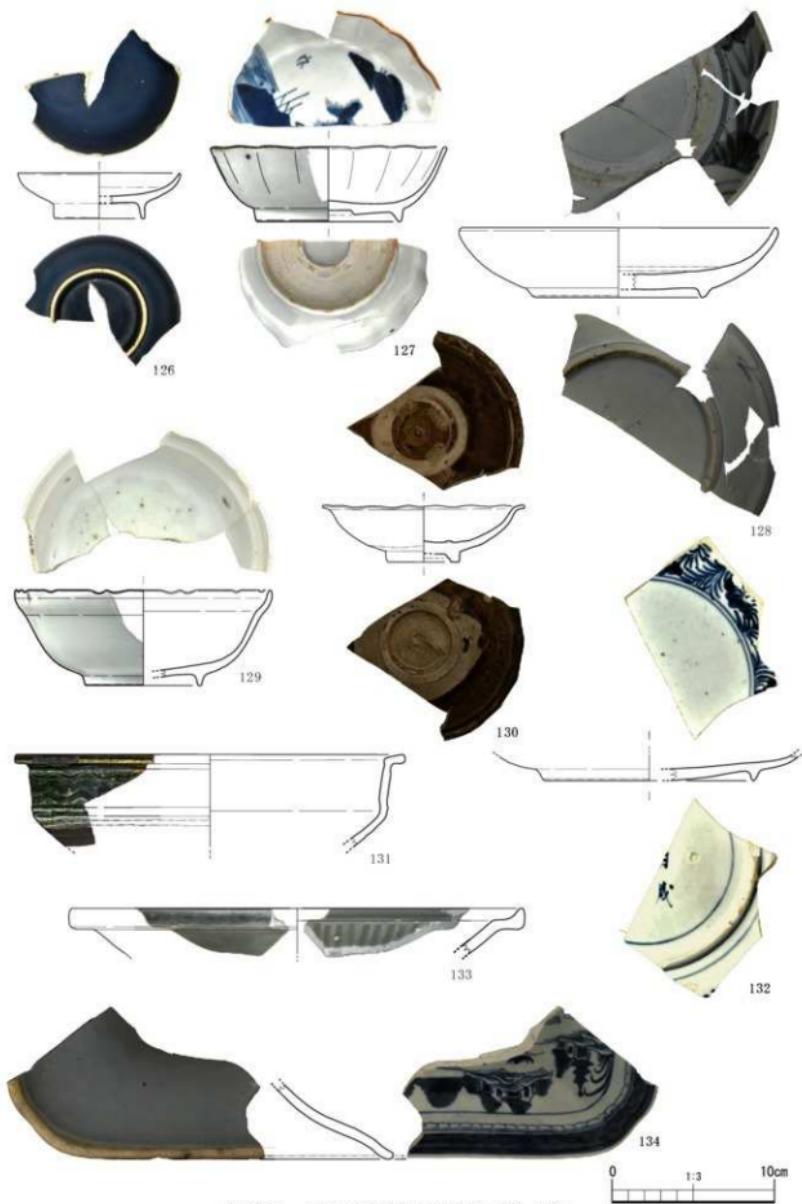
第33図 A区廐窯遺構出土遺物実測図（2）



第34図 A区廃棄遺構出土遺物実測図（3）



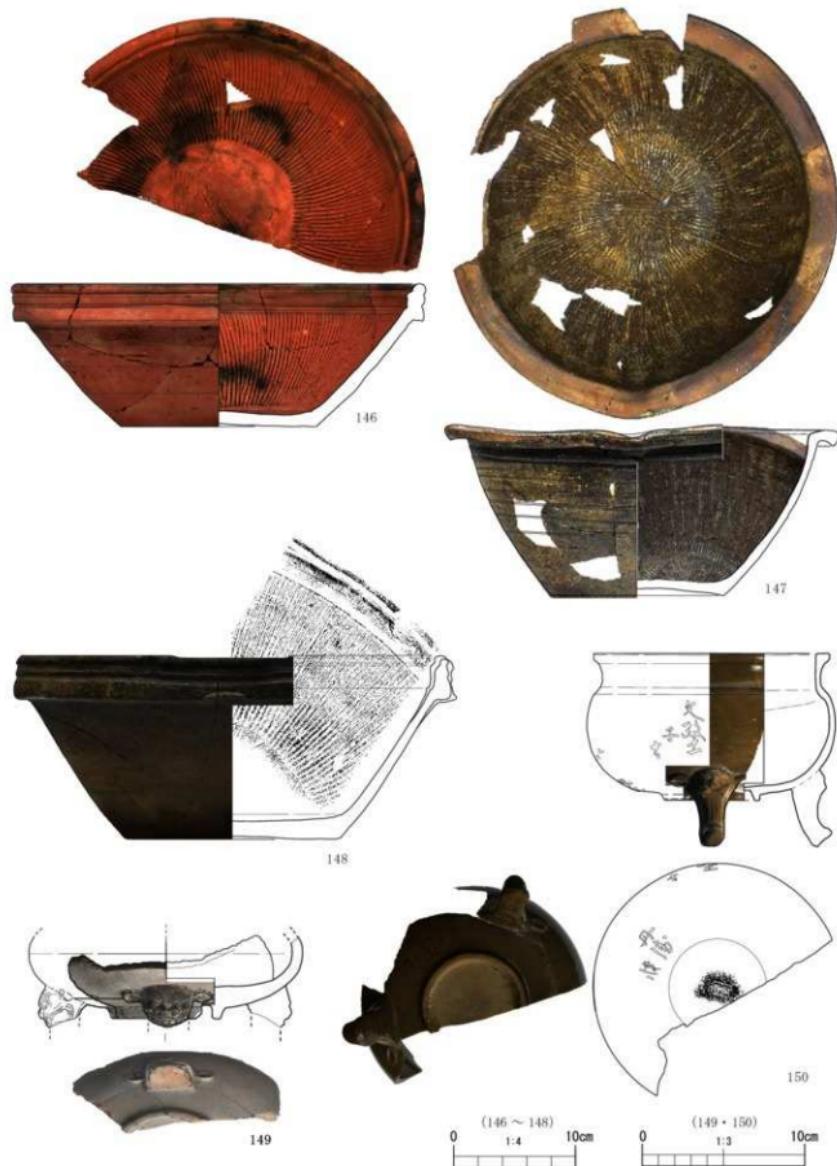
第35図 A区廐窯遺構出土遺物実測図(4)



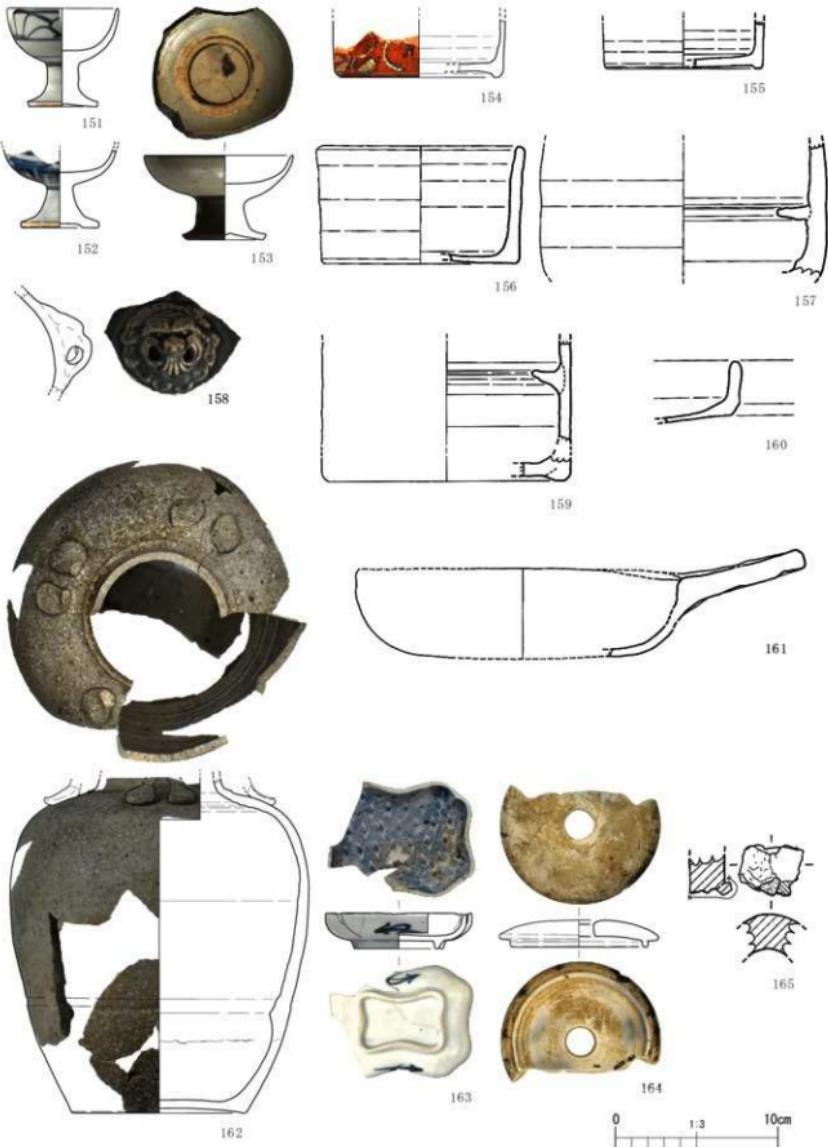
第36図 A区廃棄遺構出土遺物実測図(5)



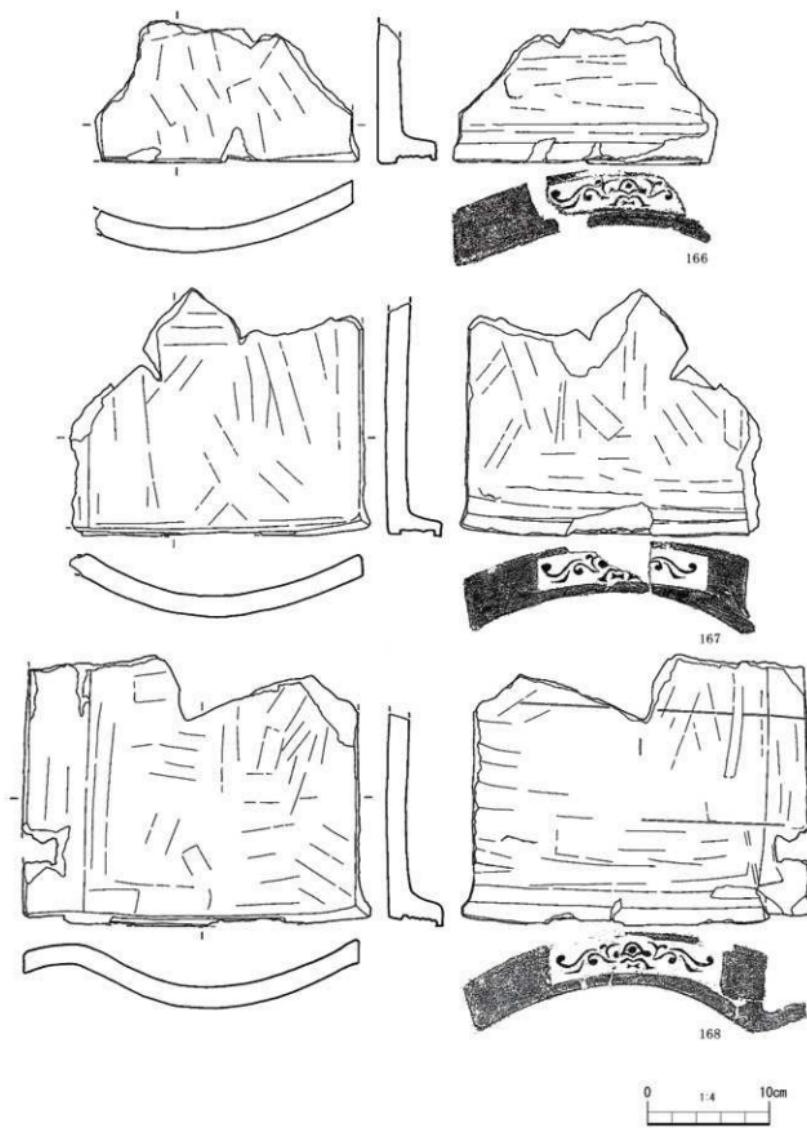
第37図 A区廐棄遺構出土遺物実測図（6）



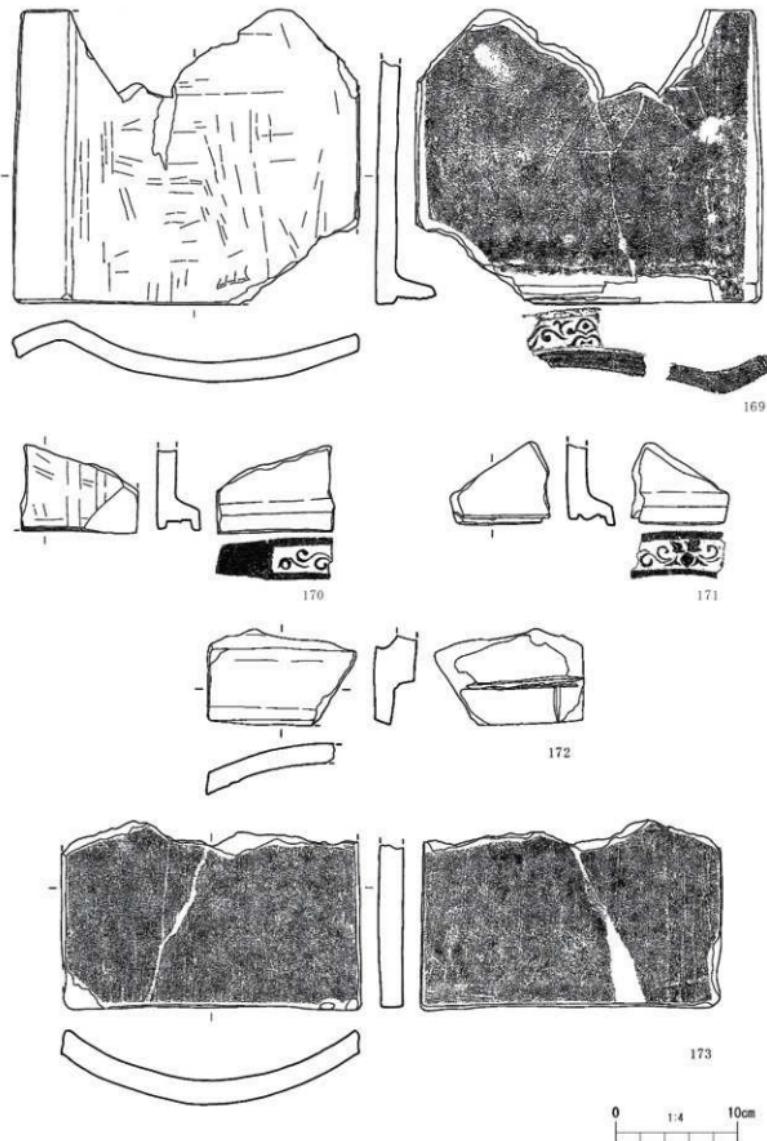
第38図 A区廃棄遺構出土遺物実測図（7）



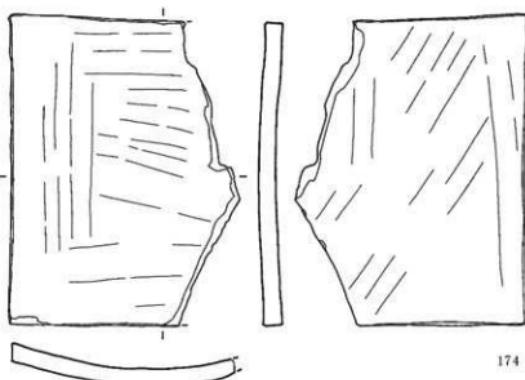
第39図 A区廃棄遺構出土遺物実測図 (8)



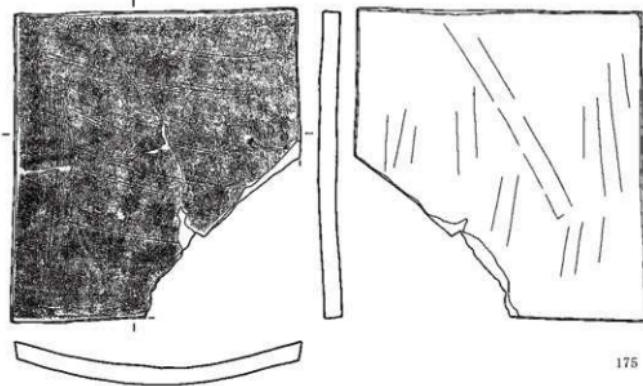
第40図 A区廐棄遺構出土遺物実測図(9)



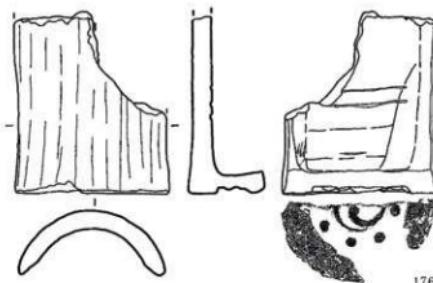
第41図 A区廐窯遺構出土遺物実測図(10)



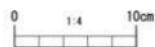
174



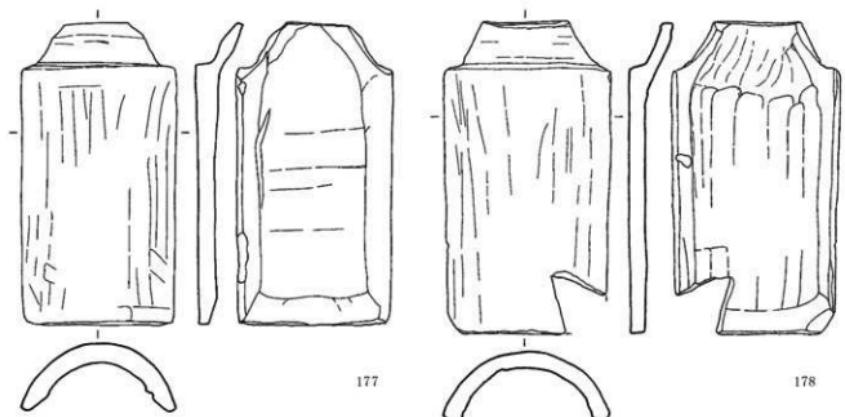
175



176

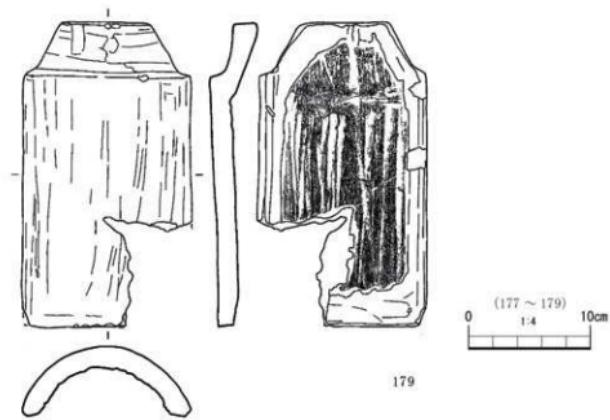


第42図 A区廃棄遺構出土遺物実測図 (11)

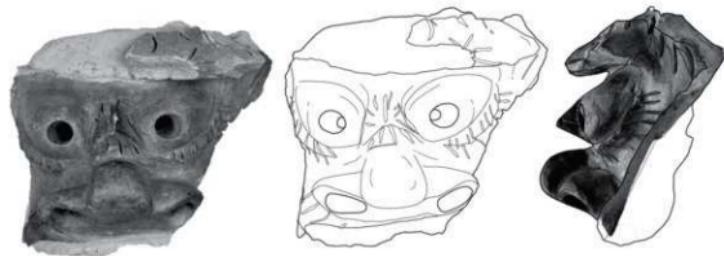


177

178



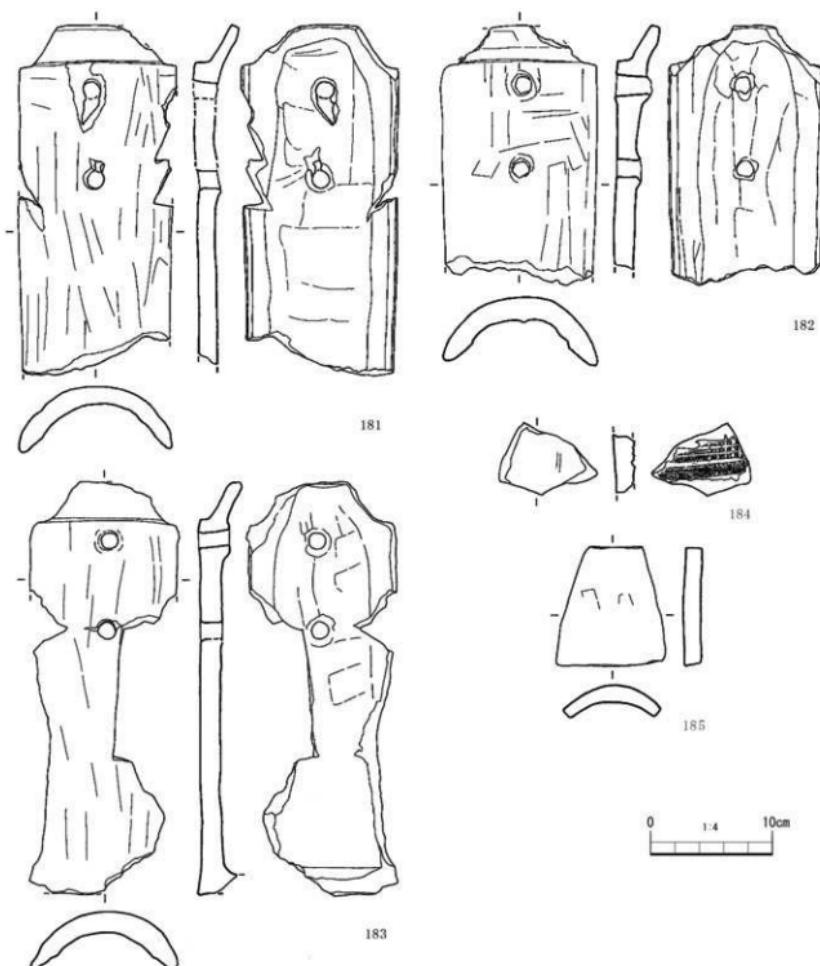
179



180



第43図 A区廃棄遺構出土遺物実測図(12)



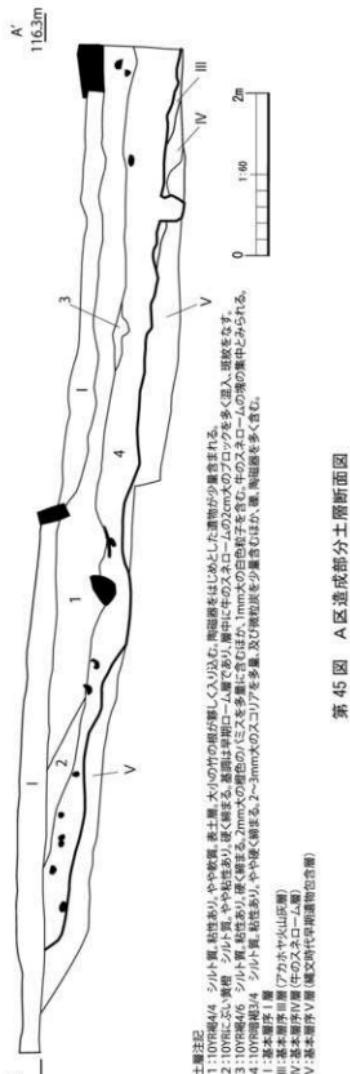
第44図 A区廃棄遺構出土遺物実測図（13）

136は胴部～底部であり、どちらも口縁部がないため袋物としたが、口縁部が窄まる徳利もしくは壺と考えられる。137～139は土瓶であり、141～144はその蓋である。141、144を除いて薩摩焼であり、薩摩藩内であることを反映している。145の器形は擂鉢だが、内面に溝が認められないことから捏鉢に分類される。146～148は擂鉢であり、147は内面だけでなく底部に至るまで溝が掘られている。149、150は線香立てである。どちらも三脚であり、脚部には型押しの獅子面が付いている。150には「文政十一」等の銘があり、

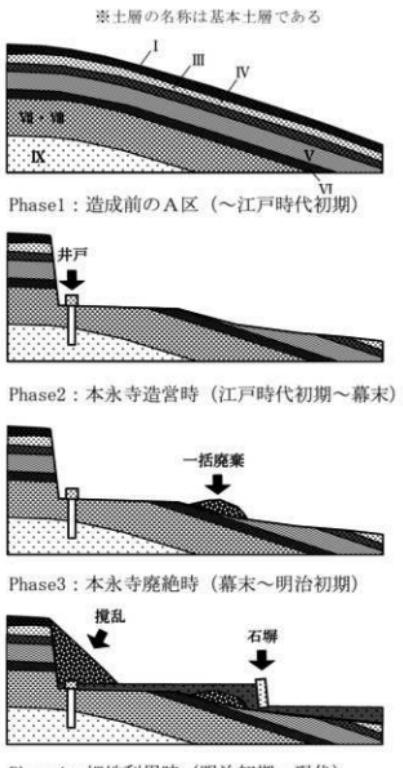
幕末に作られたことを示している。151～153は仏飯具である。154、155は素焼きであり、植木鉢等に使われた可能性が推測される。153は火鉢の把手として獅子面が施されており、佐土原城跡第6次調査で近似の出土例を見ることができる。160、161は熔岩である。162は壺形を呈しており、特殊な器面から骨壺と推測される。163は手塙皿であり、1点のみ出土した。164は香炉の蓋、165は羽口である。なお、一括廃棄から出土した遺物は2つに割れた遺物が大半を占めており、もう一方の個体が確認された例が全くないことも特徴に挙げられる。

166～185は瓦類である。出土した瓦は端が変形したものが多い。これは立てて乾燥したためと推測される。また表面にナデ成形の痕跡を残すことも特徴に挙げられる。166～175は平瓦である。176は軒丸瓦である。177～179は丸瓦である。180は鬼瓦の額から上顎の部分である。眼球と眉間は誇張して飛び出しており、黒目部分に穴を空けている。181～183は軒丸瓦であるが、屋根に取り付ける際に補強するための穴が二か所穿たれている。184の表面に残る加工は、接合する際につけられたものである。185は唯一出土した輪違瓦と推測される。

186～195は石器および石製品である。186の石材はチャートであることから、火打石と考えられる。稜上に微細な剥離が少ないとから、使用頻度は高くない。187は砂岩製の硯である。188は軽石製を研磨により加工した石製品である。一部を欠損しており、用途は不明である。189はコンクリーション



第45図 A区造成部分土壠断面図



第46図 A区の土層堆積変遷図

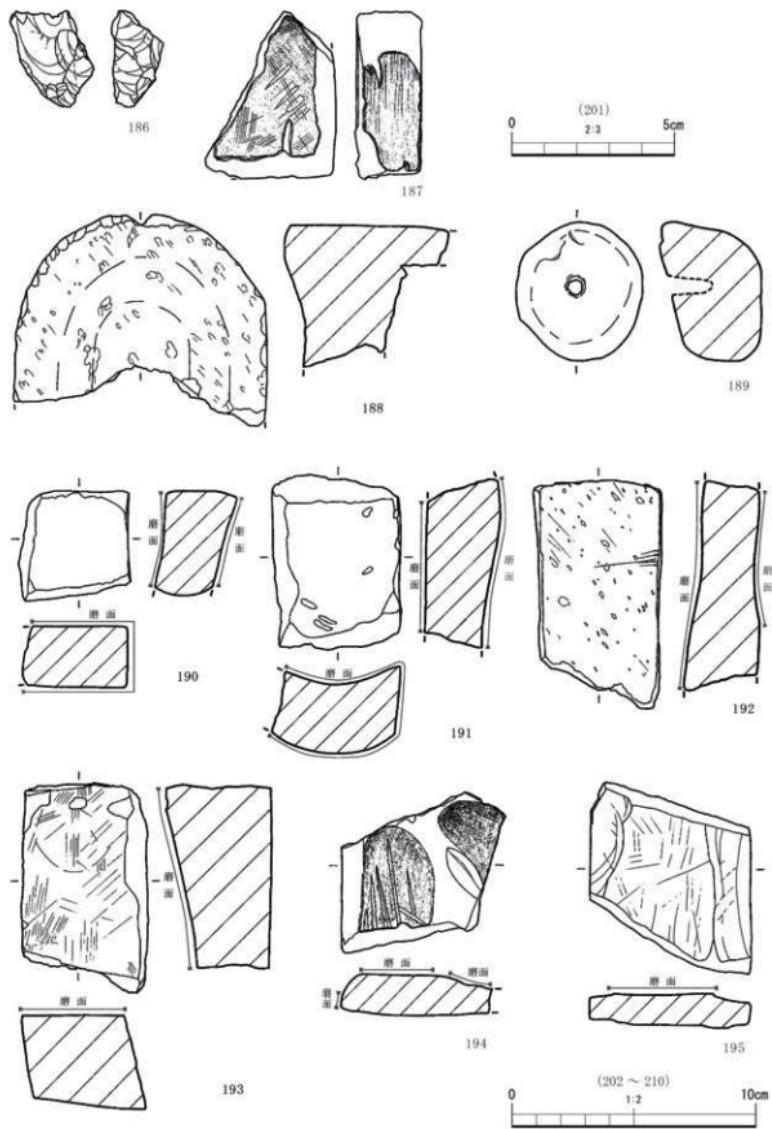
第3項 表土中の出土遺物（第48図）

以下は検出作業中に出土した遺物である。196は青磁碗である。外面には蓮弁が描かれる。197～207は染付である。200は胎土が磁器になりきっておらず文様も不鮮明であり、焼成不良と思われる。203は広東碗である。204、205は外面が青磁、内面に染を行った碗である。206は青の色調から、幕末～明治の製作と考えられる。207は意匠文様や色調から瀬戸美濃産と考えられる。208は内面底部付近まで施文した色絵の碗である。209は土瓶である。210は仏飯具である。

である。未貫通穿孔に見える部分が化石である。石の形状が奇異であるため持ち込んだと推測される。190～195は砾石である。190、191は天草石が使われ、194、195は地元からも産出される紅簾片岩を用いたものである。

7. 造成跡

中段～下段にかけて確認された。A区は西部から続く東に向かう下り勾配が続いていたが、上段と中段の境に2mに及ぶ段差を設け、造成をおこなった。中段の平坦面は、この結果である。中段の平坦面は、台地中央を通る道まで続く。この一帯が近世本永寺の寺域であったことを考えると、寺院の造営中に行われた整地と推測される。ただし、この時造成された土の行方は調査区内で確認されなかったため、不明である。また、下段から中段の東側からは、前述の整地とは別の造成の痕跡を検出した。これは東に向かう下り勾配を作出したものである。造成面の直上には一括廃棄を伴う遺物包含層の堆積を確認したことから、造成の時期は廃棄構造の前と推測されるが、造成の目的や、造成された土の行方は不明である。なお、第46図は調査区内の土層堆積を表した模式図である。



第47図 A区廃棄遺構出土遺物実測図 (14)



第48図 A区表土出土遺物実測図

第1表 出土石器観察表

器種目 記番号	番号	道構等	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考	実測 番号
p. 8 第8回	1	B VII	ナイフ形石器	黒曜石(日本)	(2.50)	(2.20)	0.85	13.33		74
	2	B VII	二次加工削片	黒曜石(日本)	2.35	2.20	0.80	3.0		73
	3	B VII	二次加工削片	黒曜石(日本)	4.20	3.40	1.00	11.0		72
	4	B VII	角擦状石器	頁岩	(5.90)	1.60	1.40	(12.5)	先端部欠損	85
	5	B VI	角擦状石器	ホルンフェルス	4.60	1.90	1.30	9.8		83
	6	B VI	剥片尖頭器	頁岩	(9.70)	3.40	1.90	(44.3)	先端部欠損	84
	7	B VII	剥片尖頭器	ホルンフェルス	(8.80)	2.70	1.45	(19.6)	先端部欠損	88
	8	B	剥片尖頭器	頁岩	(7.00)	2.60	1.50	(18.5)	先端部欠損	98
p. 9 第9回	9	B VII	剥片尖頭器	砂岩	(5.60)	3.90	1.10	(24.8)	先端部・基部欠損	87
	10	B VII	寺崎型ナイフ	加藤石(日本)	5.20	3.10	1.69	18.2	先端部欠損	97
	11	B VII	スクレーパー	頁岩	4.25	2.85	1.40	14.4		93
	12	B VII	打面調整削片	黒曜石(日本)	3.10	2.40	1.00	6.1		90
	13	B VII	打面調整削片	黒曜石(日本)	3.60	2.30	0.90	6.9		91
	14	B VII	残核	黒曜石(日本)	4.15	4.90	3.00	42.4		117
	15	B VII	残核	頁岩	4.00	7.20	4.60	94.6		96
	16	B VII	石核	黒曜石(日本)	2.35	3.10	2.30	13.5		89
	17	B VII	剥片	頁岩	6.10	5.10	1.95	46.2		92
p. 10 第10回	18	B 71	剥片	頁岩	6.70	6.50	1.90	43.4		94
	19	B VII	縦長削片	ホルンフェルス	12.45	3.00	1.85	41.6		96
	20	B V	細石石核	頁岩	2.85	3.20	2.3	21.7	21と接合	86
	21	B V	調整削片	頁岩	2.65	2.80	0.9	4.7	20と接合	86
	22	B	石核	黒曜石(桑ノ木津留)	1.90	(1.00)	0.20	(0.1以下)	脚部欠損	99
	23	B V	石核	黒曜石(日本)	2.00	(1.10)	0.30	(0.1以下)	脚部欠損	100
	24	B V	石核	チャート	1.85	(1.50)	0.35	0.5	脚部欠損	101
p. 11 第11回	25	B V	石核	黒曜石(桑ノ木津留)	1.50	1.45	2.50	0.1以下		102
	26	C	石核	黒曜石(桑ノ木津留)	2.20	1.25	0.45	0.6	脚部欠損	104
	27	C III	右轍	チャート	(1.50)	1.40	0.32	0.5	先端部欠損	105
	28	C V	石核	黒曜石(桑ノ木津留)	1.50	1.10	0.22	0.2		106
	29	C V	石核	玉髓	2.45	1.10	0.35	0.7		108
	30	C V	石核	玉髓	2.00	1.15	0.30	0.3		107
	31	C V	石核	黒曜石(桑ノ木津留)	(1.70)	(0.90)	0.30	0.2	先端部・脚部欠損	110
p. 12 第12回	32	C V	石核	黒曜石(桑ノ木津留)	1.15	1.10	0.35	0.1以下		109
	33	C V	石核	黒曜石(桑ノ木津留)	1.55	1.20	0.25	0.2		112
	34	C	石核	黒曜石(桑ノ木津留)	1.65	1.45	0.40	0.4		103
	35	C V	石核	黒曜石(桑ノ木津留)	1.80	1.40	0.55	0.8		111
	36	C V	磨石	砂岩	7.25	4.55	4.05	187.0		114
	37	C V	磨石	砂岩	10.10	7.35	4.30	407.7		115
	38	C VI	磨石	砂岩	9.40	9.35	5.20	543.1		95
p. 13 第13回	39	C V	磨石	砂岩	15.65	14.80	5.70	1872.0		116
	40	C	手磨	鶴羽石	5.90	5.45	4.50	219.9		113
	41	C V	手磨	黒曜石(桑ノ木津留)	5.10	6.30	3.20	92.5		82
	42	C V	手磨	黒曜石(桑ノ木津留)	(4.50)	(4.50)	4.50	186.0		117
	43	C V	手磨	天草石	(4.55)	(4.65)	(3.35)	91.0		118
	44	C V	手磨	天草石	(4.55)	(4.65)	(3.35)	186.1		119
	45	C	手磨	天草石	(4.60)	(4.60)	(3.35)	186.0		120
p. 14 第14回	46	C V	手磨	天草石	(4.60)	(4.60)	(3.35)	186.0		121
	47	C V	磨石	砂岩	7.25	4.55	4.05	187.0		114
	48	C V	磨石	砂岩	10.10	7.35	4.30	407.7		115
	49	C VI	磨石	砂岩	9.40	9.35	5.20	543.1		95
	50	C V	磨石	砂岩	15.65	14.80	5.70	1872.0		116
	51	C	手磨	鶴羽石	5.90	5.45	4.50	219.9		113
	52	B V	石核	黒曜石(桑ノ木津留)	5.10	6.30	3.20	92.5		82
	53	C 滅納土坑	不明	鶴石	6.70	6.55	2.20	22.0		125
	196	A	火打石	チャート	2.95	2.60	1.60	9.7		75
	197	A 一括	硃	砂岩	(5.10)	(4.00)	2.00	51.7		28
p. 15 第15回	198	A 一括	石製品	鶴石	(6.60)	10.40	(6.70)	120.7		76
	199	A 一括	不明	鶴羽石	5.70	5.20	4.15	157.4		77
	200	A	硃石	天草石	(4.55)	(4.65)	(3.35)	91.0		118
	201	A 一括	硃石	天草石	(7.20)	(5.35)	(3.55)	186.1		119
	202	A 一括	硃石	鶴質陶器	(6.40)	5.30	(3.10)	229.0		120
	203	A 一括	硃石	泥炭	(6.65)	(5.25)	(4.30)	299.2		121
	204	A 一括	硃石	砂岩	(6.60)	(6.70)	(3.70)	102.6		122
	205	A 一括	硃石	粗糠片岩	(7.80)	6.65	(1.40)	92.0		123

※ () は現存法量

第2表 出土土器観察表

掘削井 固番号	番号	種別等	法量cm 容積 口径 底径 高さ	復元 外 面 内 面	施成	測定		出土(上:右 下:左)				備考	実番号	
						外面	内面	A	B	C	D	E		
p.16 第14回	22	C印穴5	圓文 深鉢	— —	— —	黄斑 2.5VR4/1 7.SYR5/3	良好	貝殻邊縫押引文	ナダ	2 少	1 多		口沿部 キザミ、 ミガキ	18
	23	C印穴5	圓文 深鉢	— —	5.2 —	明褐色 5VR7/2 5VR5/3	良好	ミガキ	ナダ	微 少	1 多			1
p.17 第16回	24	C V	圓文 深鉢	— —	— —	にぶい黃斑 10VR6/3 10VR6/3	良好	朱刷文	ナダ (摩擦痕)	1 少	微 多			13
	25	C V	圓文 深鉢	— —	— —	明褐色 7.SYR7/1 7.SYR5/3	良好	貝殻押引文、 貝殻縫痕文	ナダ	1 少	2 多			16
p.18 第17回	26	C V	圓文 深鉢	— (20.4)	— —	明褐色 5VR7/1 5VR7/1	良好	貝殻邊縫押引文 朱刷文 ナダ	丁寧なナダ、 ミガキ	1 少			口沿部 キザミ	9
	27	C V	圓文 深鉢	— —	— —	灰白 10VR7/1 7.SYR7/2	良好	又狀工具による 押引文	ナダ	1 少	1 多	2	口沿部 キザミ	8
p.19 第18回	28	C V	圓文 深鉢	— —	— —	にぶい黃斑 10VR5/3 7.SYR5/3	良好	貝殻刺突文 ナダ	ナダ	2 多	微 少			19
	29	C V	圓文 深鉢	— —	— —	にぶい黃斑 10VR6/4 7.SYR5/4	良好	貝殻刺突文 ナダ	摩擦により不明	3 少	2 多			5
p.20 第19回	30	C V	圓文 深鉢	— —	— —	にぶい黃斑 10VR6/3 10VR6/4	良好	貝殻邊縫押引文 穿孔未貫通	ナダ	2 多	微 少			11
	31	C V	圓文 深鉢	— —	— —	灰黃色 10VR6/2 10VR6/2	良好	工具の後ナダ	ナダ	微 少	1 多		底面に白色の粘 質土付着	2
p.21 第20回	32	C VI	圓文 深鉢	— (4.6)	— —	にぶい黃斑 7.SYR6/4	良好	貝殻復縫による 押引文	ナダ	1 少	微 少	1 多		6
	33	C IV 8 SC2	土師器 片	(6.8)	(6.0)	1.8 明褐色 7.SYR7/1 5VR7/1	良好	回転ナダ	回転ナダ、ナダ	微 少			底面 素切底	4
p.22 第21回	35	C SH58	土師器 片	11.8	6.8	3.4 明褐色 7.SYR7/1 7.SYR5/3	良好	回転ナダ	回転ナダ	微 少			底面 回転系切	17
	36	C SH12-2	土師器 片	(12)	(7.4)	3.9 にぶい黃斑 7.SYR6/4	良好	回転ナダ	回転ナダ	微 少			底面 回転系切	14
p.23 第22回	37	C SH64	土師器 片	—	—	2.5 にぶい黃斑 10VR5/3 7.SYR6/4	良好	回転ナダ	回転ナダ	微 少			底面 ハラ切 内外面に黒斑有	15
	38	C	土師器 土鉢	2.65 (長) (幅)	1.25 (幅) (厚)	L.I にぶい黃斑 7.SYR6/2	良好	ナダ						12
p.24 第23回	155	A一括 A	土師器 片	—	(16.2)	— にぶい黃斑 2.5VR5/4	良好	回転ナダの後 丁寧なナダ	回転ナダ、ナダ	微 少				3
	156	A ②	土師器 片	(12.9)	(12.7)	7.7 にぶい黃斑 大 5VR5/4	良好	ナダ	ナダ	1 少				7
p.25 第24回	157	A ②	土師器 七輪	—	—	にぶい黃斑 5VR4/3 5VR5/4	良好	ナダ	回転ナダ	微 多	1 多		内出一部スス付 着	19
	158	A	土師器 七輪	—	(15.6)	— にぶい黃斑 10VR6/3 10VR6/2	良好	調状压痕	回転ナダ	1 多			二次的加熱痕有	22
p.26 第25回	159	A一括 A	土師器 片	—	—	にぶい黃斑 7.SYR5/3 5VR5/3	良好	回転ナダ	回転ナダ	1.5 少	1 多		外表面全面にスス 付着	29
	160	A一括 A一括上 結晶	土師器 片	—	—	灰褐色 7.SYR5/3 5VR5/3	良好	ナダ	回転ナダ				外表面 スス付着	21
p.27 第26回	161	A一括 A一括下 結晶	土師器 片	—	—	灰褐色 7.SYR6/2 10VR6/2	良好	回転ナダ ナダ	回転ナダ、ナダ				外表面 スス付着	23
	163	A一括F 「フイガ」 の羽口	土師器 片	—	—	にぶい黃斑 10VR5/3 10VR6/3	良好	竹管の刺突	ナダ					23

第3表 出土陶器観察表(1)

高値頁 番番号	番号	造形等	種別	器種	法量 cm ()		測定 員	測定 地	時期	備考	実測 番号
					口径	底径					
p.27 第26回	59	C	染付	壺	3.5	—	1.1			菊文様、外面に透明釉	184
	60	C	染付	瓶	—	4.8	—			内外面に透明釉	187
	65	A (2)	染付	瓶	(16.2)	(3.8)	5.3			内外面に透明釉 費用は羅別・織れ砂付者	145
	66	A (2)	染付	瓶	(16.4)	3.9	5.3			内外面に透明釉 費用は羅別	146
	67	A (1) —柄上	染付	瓶	9.5	3.5	5.1			内外面に透明釉 費用は羅別	127
	68	A (2)	染付	端反転	(11.7)	(4.5)	6.4		19C以前	内外面に透明釉 費用は羅別	135
	69	A (4)	染付	瓶	(11.5)	4.9	6.0		1750～1790	外函に青磁 内面に透明釉 費用は羅別	128
	70	A—柄 —柄上—柄下	染付	小丸瓶	(7.9)	(3.4)	5.4			内外面に透明釉 費用入り 費用は羅別	149
	71	A—柄 A (2)	染付	瓶	11.3	2.4	5.9		19C以前	外函に青磁 一面に透明釉 費用入りノ貝印 初花コニニヤク印判 費用は羅別・織れ砂付者	136
	72	A (2)	染付	湯呑	(12.05)	4.95	4.8			内外面に透明釉 見込に蛇ノ目模刻ぎ・砂目横 費用は羅別・織れ砂付者	140
p.35 第32回	73	A—柄上	染付	瓶	(12.2)	5.0	4.7		17C以前	外函に染付 内外面に透明釉 見込に蛇ノ目模刻ぎ・砂目横 費用は羅別	162
	74	A (2)	染付	瓶	(11.8)	4.3	4.9			内外面に透明釉 外函に染付 (丸穴) 見込に蛇ノ目模刻ぎ・砂目横 費用は羅別	144
	75	A—柄	染付	瓶	(11.8)	(4.6)	5.4			内外面に透明釉 外函に染付 (丸穴) 見込に蛇ノ目模刻ぎ・砂目横 費用は羅別	143
	76	A—柄	染付	広葉瓶	(11.4)	(3.8)	6.4		1780年以降	外函に白色釉・染付 染付は羅別	132
	77	A (2) —柄下	染付	瓶	(10.8)	(4.15)	6.25			内外面に透明釉 外函に染付 (コンニヤク印判) 費用は羅別・織れ砂付者	154
	78	A—柄	染付	湯呑茶碗	—	4.2	—		1750～1790年	外函に青磁 内面に透明釉・染付 費用は羅別・織れ砂付者	151
	79	A (2) —柄下	染付	湯呑茶碗	(11.8)	(4.2)	6.2		渡波見?	外函に青磁 内面に透明釉・染付 費用は羅別・織れ砂付者	152
	80	A (1) —柄下	染付	蘭形瓶	(7.7)	(4.0)	5.8		1780年以降	外函に透明釉 費用は羅別	155
	81	A—柄	染付	蘭形瓶	(7.1)	(3.7)	4.95		1780年以降	外函に透明釉 費用は羅別	156
	82	A (2)	染付	蘭形瓶	(7.4)	(4.0)	5.5		1780年以降	外函に透明釉	157
p.36 第33回	83	A (4)	染付	端反転	(9.8)	(4.0)	6.15		19C	内外面に透明釉 費入あり 費用は羅別	147
	84	A (2)	染付	端反転	12.6	6.4	5.9		19C以前	内外面に透明釉 費用は羅別	137
	85	A (2)	染付	端反転	(12.75)	(5.0)	5.05		19C以前	内外面に透明釉 見込に砂目横 費用は羅別・織れ砂付者	139
	86	A (2)	胸器	瓶	11.4	4.6	5.2		19C以前	内外面に透明釉 費入あり 見込に蛇ノ目模刻ぎ 費用は羅別	129
	87	A—柄F (2)	染付	端反転	12.7	5.3	4.5		19C	内外面に透明釉 見込に蛇ノ目模刻ぎ・砂目横 費用は羅別	166
	88	A (2)	磁器や黒 種類?	端反転	(11.6)	(5.2)	5.95			内外面に透明釉 費用は羅別	138
	89	A (2)	染付	端反転	(12.2)	(4.65)	5.4		19C	内外面に透明釉 ロハゲ 見込に蛇ノ目模刻ぎ 費用は羅別	141
	90	A (3)	青磁	瓶	—	5.3	—			底輪の模様は?	197
	91	A—柄上	青磁	瓶	(12.6)	(6.0)	6.4			外函に模様?	195
	92	A (2) —柄上	磁器	瓶	11.6	4.6	5.45			外函に透明釉 見込に蛇ノ目模刻ぎ 費用は羅別・織れ砂付者	237
p.37 第34回	93	A—柄 —柄下	胸器	瓶	13.1	4.8	5.4			内外口縁に被れあり 見込に蛇ノ目模刻ぎ 費用は羅別	203
	94	A—柄	胸器	瓶	13.4	4.8	7.7			見込に蛇ノ目模刻ぎ 費用は羅別・織れ砂付者	206
	95	A (2) + (3) —柄下	胸器	瓶	(12.4)	4.7	6.3			見込に蛇ノ目模刻ぎ 費用は羅別	204
	96	A (2) —柄下	胸器	瓶	(11.8)	4.4	5.7			見込に蛇ノ目模刻ぎ 費用は羅別	205
	97	A—柄	胸器	瓶	—	4.4	—			外函に千鳥文 費用は羅別	200

第4表 出土陶器観察表(2)

揭露頁 団番号	番号	造構等	種別	器種	法量 cm () : 複元			産地	時期	備考	実物 番号
					口径	底径	厚さ				
p.37 第34回	98	A一括	陶器	瓶	—	5.0	—			内外面に透明釉・真入あり 蓋付は黒釉	207
	99	A一括 ②	陶器	罐反腹	(12.2)	4.4	4.9			内外面に透明釉 見込に粒ノ目釉割ぎ 蓋付は黒釉	208
	100	A ①+④ 一括下	陶器	罐反腹	(11.6)	(4.6)	5.25			内外面に透明釉 見込に粒ノ目釉割ぎ? 蓋付は黒釉	209
	101	A ②	陶器	瓶	—	3.9	—	薪		内外面に透明釉 蓋付は黒釉	212
	102	A ②	陶器	瓶	(9.35)	3.2	5.5	底部開口系?		外面に染付 蓋付は黒釉	202
	103	A ①	染付	瓶	—	2.1	—	薪		内外面に透明釉 蓋付は黒釉	238
	104	A一括	陶質	瓶	(12.2)	(4.1)	4.7	底部開口系?		内外面に透明釉 内面に梅の色絵 蓋付は黒釉	210
	105	A ② 一括下	陶胎染付	瓶	—	10.7	4.0	4.3		見込に粒ノ目釉割ぎ 蓋付は黒釉	201
	106	A一括上	青花	基面底網	—	3.2	—		江戸後期	内外面に透明釉 蓋付は黒釉	188
	107	A一括	青花?		(9.4)	(4.6)	4.75			内外面に透明釉 蓋付は黒釉	189
p.38 第35回	108	A ②	染付	鉢異種?	—	—	—	輸入品		外表面に透明釉・焼成時の気泡あり	190
	109	A ②	白磁	罐反腹	8.2	3.55	4.45	福建省德化窯	18C 後期	外表面に乳白釉	191
	110	A ② 一括上	磁器	小罐反腹	(9.8)	3.8	5.2		18C 以降	外表面に透明釉 蓋付は黒釉	148
	111	A一括上	白磁	罐反腹?	(9.8)	(4.2)	4.4			外表面に透明釉 蓋付は黒釉	192
	112	A ② 一括下	白磁	罐反腹?	(8.0)	(3.4)	4.25	福建省德化窯		外表面に乳白釉 蓋付は黒釉・砂目	193
	113	A ①+④ 一括	磁器	罐反腹?	8.4	3.6	4.4	福建省德化窯		外表面に透明釉	194
	114	A ② 一括下	染付	瓶の蓋	9.4	4.2	3.0		江戸後期	上面に透明釉・真入あり	177
	115	A ①+④	染付	瓶の蓋	9.3	—	—		江戸後期	上面に透明釉・真入あり	178
	116	A一括	染付	瓶の蓋	8.7	—	2.6		1750~1790年	上面に青花? 下面に染付 つまみ出しが側に付いてる	175
	117	A ①	染付	瓶の蓋	(8.8)	—	2.8		1750~1790年	上面に青花? 下面に染付 つまみ出しが側に付いてる	176
	118	A一括下	染付	瓶の蓋	(9.6)	—	—			上面に透明釉	179
	119	A ③	色绘	瓶の蓋	(11.6)	—	—			上面に透明釉	180
	120	A ②	染付	猪口	(7.0)	2.6	3.4			外表面に透明釉 蓋付は黒釉・砂目	161
	121	A ⑥	染付	小杯	(5.6)	(3.8)	3.8			外表面に透明釉 蓋付は黒釉	159
	122	A一括上	染付	小杯	5.3	3.5	4.9			外表面に透明釉 蓋付は黒釉	160
	123	A ①	染付	小杯	(7.4)	5.4	5.9			外表面に透明釉 蓋付は黒釉	158
	124	A ② 一括上	染付	小杯	(15.8)	(8.2)	7.8			外表面に透明釉・チサ軸割ぎ 蓋付は黒釉	170
	125	A ②+④ 一括下	磁器	小鉢	(13.6)	(9.8)	4.0			外表面に透明釉 蓋付は黒釉	171
P.39 第36回	126	A一括上	磁器	小皿	(10.0)	5.6	2.8			外表面にうら釉 蓋付は黒釉	235
	127	一括	染付	輪花小盤	(14.6)	(9.0)	4.7		江戸後期	外表面に透明釉	169
	128	A ②+③ 一括	染付	皿	(19.6)	(18.6)	4.3		17C以後 江戸後期	外表面に透明釉 見込に粒ノ目釉割ぎ 蓋付は黒釉・砂目等	185
	129	A ①+② 一括上	磁器	輪花皿	(15.8)	(7.2)	5.9			外表面に透明釉 見込に粒ノ目釉割ぎ 蓋付は黒釉・砂目等	167
	130	A ③	陶器	皿	(12.4)	4.3	3.5			外表面に揚花 見込に粒ノ目釉割ぎ 蓋付は黒釉	211
	131	A ③	陶器	大皿	(24.0)	—	—			外表面に揚花	223
	132	A ②	染付	大皿	—	(12.8)	—			外表面に透明釉	168
	133	A	青磁	大皿	(28.0)	—	—			外表面に透明釉	196
P.40 第37回	134	A ③	染付	長盤の蓋	—	—	—			外表面に透明釉 外面に染付	186
	135	A ② 一括上	陶器	袋物	—	12.2	—			外表面に拂繪?	231
	136	A ②	染付	袋物	—	8.6	—			外表面に透明釉 蓋付は黒釉・砂目等	181
	137	A ③	陶器	急須	—	—	—			外表面に透明釉 注口内側3孔あり 脚部3ヶ所?	216

第5表 出土陶器観察表(3)

高値頁 圖番号	番号	造形等	種別	器種	法量 cm ()			产地	時期	備考	実測 番号
					口径	底径	器高				
P. 40 第37回	138	A ②	陶器	急須	(7.0)	—	—			内外面に透明釉 注ぎ口内部3孔あり	217
	139	A 一括	陶器	急須	(14.2)	(5.4)	12.2			外面に緑釉? 内面に施焼れあり スヌ付着	215
	140	A 一括 —括上	陶器	壺	(25.0)	—	—			内外面に網目	225
	141	A 一括	陶器	急須	—	—	—			外面に菊花文型押し	218
	142	A 一括	陶器	急須蓋	5.1	つまみ 1.5	3.5			外面に透明釉	220
	143	A ①	陶器	急須蓋	6.65	1.6	3.0			外面に透明釉	219
	144	A ③	陶器	急須蓋	5.8	1.6	3.4			外面に透明釉	221
	145	A ③	陶器	壺	21.8	17.7	9.0				224
	146	A ④	陶器	壺	(34.0)	(16.0)	11.65			内外面にスヌ付着	227
P. 41 第38回	147	A 一括 ③	陶器	壺	32.2	14.1	14.0			外面に緑斑	228
	148	A 一括 ② —括上	陶器	壺	(35.2)	17.8	15.0				226
	149	A ①・②	陶器	襷香立	—	—	—			内外面に透明釉 脚部2箇所?	222
	150	A ③	青磁	襷香立	(14.6)	(5.9)	11.9			銘文に「支政十一子」「丹波作」 落款あり	213
	151	A ②	染付	伝瓶具	(6.8)	4.2	6.0			内外面に透明釉	173
P. 42 第39回	152	A 一括上	染付	伝瓶具	—	(4.8)	—			内外面に透明釉	174
	153	A ④	陶器	伝瓶器	(9.2)	4.8	5.2			見込に蛇ノ目模様?・重ね焼き底	212
	154	A 一括	素焼	杯	—	9.8	—			外面に網目、着色あり スヌ付着	234
	158	A ③	火鉢	楕円 把手	—	—	—	瀬戸美濃	19C 以前	外面に緑斑	198
	162	A 一括 ②	陶器	四耳壺	—	10.8	—				199
P. 51 第40回	163	A ② —括上	染付	平腹壺	9.0	5.5	2.2			内外面に透明釉 質は織物	187
	164	A 一括上	瓦質	壺	8.5	1.8	8.4			穿孔あり スヌ付着	233
	196	A	青磁	瓶	—	—	—			内外面に透明釉 貫入あり 外面に縦文様	230
	197	A	染付	端反瓶	(10.8)	(3.8)	5.8		19C	内外面に透明釉 外面に丸文 見込にコシニヤク印判 刃目縫 袋付は織物	131
	198	A	染付	瓶	(11.0)	4.2	5.4			内外面に透明釉 外面に丸文 見込にコシニヤク印判	142
	199	A	染付	瓶	(11.0)	(4.5)	5.35		1750～1790	外側は青磁 内面に透明釉 染付 袋付は織物	165
	200	A	陶器	瓶	(13.0)	5.0	6.4			外側に白釉・透明釉 内面に透明釉 見込に蛇ノ目模様?	236
	201	A	染付	瓶	(11.0)	4.4	5.7		19C 以降	内外面に白釉・貫入あり 見込に蛇ノ目模様?	133
	202	A	染付	瓶	—	4.3	—			袋付は織物	163
	203	A	染付	仄口瓶	(11.4)	(6.2)	6.0		1780年以降	内外面に透明釉 袋付は織物	134
P. 52 第41回	204	A	染付	湯呑 茶碗	(10.9)	3.8	5.7	瀬戸見?	1750～1790	内面は染付 袋付は織物・付着物あり	150
	205	A	染付	湯呑 茶碗	(11.4)	4.1	6.95	瀬戸見?	1750～1790	内面は青磁 内面は染付 袋付は織物・付着物あり	153
	206	A	染付	端反瓶	(10.2)	(3.8)	5.4		19C	内外面に透明釉 袋付は織物 質が小塊?	164
	207	A	染付	端反瓶	9.2	3.7	9.3		瀬戸美濃	内外面に透明釉 袋付は織物	130
	208	A	陶器	急須	(5.1)	(4.3)	6.7	高摩?		内外面に透明釉 袋付は織物	183
	209	A	陶器	急須	—	(4.9)	—			内外面に透明釉 袋付は織物	214
	210	A	染付	伝瓶具	(6.39)	4.4	6.5			内外面に透明釉 袋付は織物 二次被熱あり	172

※ () は複数法値。

第6表 出土瓦観察表

発掘資料番号	番号	造形等	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考	実測 番号
P. 31 第 28 回	61	石窓造形	袖瓦	(15, 60)	(11, 60)	(4, 75)		126
	62	石窓造形	棟瓦	(12, 80)	(9, 20)	(2, 05)		27
	63	石窓造形	棟瓦	(9, 40)	(12, 35)	(3, 55)		25
	64	石窓造形	平瓦	(7, 85)	(4, 90)	(1, 75)		28
P. 43 第 40 回	166	A ①	軒平瓦	(11, 70)	(21, 70)	(4, 90)		36
	167	A ①	軒平瓦	(20, 20)	(24, 75)	(4, 45)		35
	168	A ①	軒平瓦	(22, 20)	28, 70	4, 70		37
P. 44 第 41 回	169	A ①	軒平瓦	(24, 15)	28, 45	(4, 95)		44
	170	A ②	軒平瓦	(7, 20)	(9, 70)	(3, 65)		29
	171	A 一括下	軒平瓦	(6, 70)	(8, 10)	(4, 05)		32
	172	A 一括上	伏間瓦	(8, 90)	(12, 45)	(4, 20)		30
P. 45 第 42 回	173	A ①	平瓦	(16, 90)	(24, 80)	6, 65		33
	174	A ①	平瓦	25, 50	(19, 20)	3, 55		26
	175	A ①	平瓦	25, 85	24, 05	3, 60		24
P. 46 第 43 回	176	A ②	軒丸瓦	(12, 70)	14, 90	6, 25		39
	177	A ①	丸瓦	24, 70	12, 80	5, 55		42
	178	A ①	丸瓦	25, 65	13, 85	5, 70		40
	179	A ①	丸瓦	24, 90	14, 00	5, 65		45
P. 47 第 44 回	180	A 一括上	翫り瓦	14, 30	16, 10	9, 30		229
	181	A ①	丸瓦	28, 70	13, 05	5, 35		43
	182	A ①	丸瓦	21, 20	12, 75	5, 55		41
	183	A ①	丸瓦	23, 95	12, 25	3, 65		38
	184	A ④	平瓦	(6, 00)	(8, 10)	(1, 80)		31
	185	A ①	輪邊瓦	9, 75	9, 00	2, 65		34

※ () は既存出数

第4章 自然化学分析

第1節 はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素 (^{14}C) の濃度が放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土器付着炭化物などが測定対象となり、約5万年前までの年代測定が可能である（中村、2003）。

第2節 試料と方法

次に、測定試料の詳細と前処理・調整法および測定法を示す。

第7表 放射性炭素年代測定方法と試料リスト

試料No.	試料の詳細	種類	前処理・調整法	測定法
No. 1	炉穴1, 埋土中	炭化物	酸 - アルカリ - 酸洗浄	AMS
No. 2	炉穴3, 埋土中	炭化物	酸 - アルカリ - 酸洗浄	AMS
No. 3	炉穴4, 埋土中	炭化物	酸 - アルカリ - 酸洗浄	AMS
No. 4	炉穴5, 埋土中	炭化物	酸 - アルカリ - 酸洗浄	AMS
No. 5	炉穴7, 埋土中	炭化物	酸 - アルカリ - 酸洗浄	AMS
No. 6	炉穴8, 埋土中	炭化物	酸 - アルカリ - 酸洗浄	AMS

第3節 測定結果

加速器質量分析法 (AMS: Accelerator Mass Spectrometry) によって得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素 (^{14}C) 年代および曆年代（較正年代）を算出した。表1にこれらの結果を示し、図1に曆年較正結果（較正曲線）を示す。

(1) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C} / ^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C} / ^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を -25‰ に標準化することで同位体分別効果を補正している。

(2) 放射性炭素 (^{14}C) 年代測定値

試料の $^{14}\text{C} / ^{12}\text{C}$ 比から、現在 (AD1950年基点) から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は 5730 年であるが、国際的慣例により Libby の 5568 年を用いている。統計誤差 (\pm) は 1σ (68.2% 確率) である。 ^{14}C 年代値は下1桁を丸めて表記するのが慣例であるが、曆年較正曲線が更新された場合のために下1桁を丸めない曆年較正用年代値も併記した。

(3) 曆年代 (Calendar Years)

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動および ^{14}C の半減期の違いを較正することで、放射性炭素 (^{14}C) 年代をより実際の年代値に近づけることができる。曆年代較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な ^{14}C 測定値およびサンゴの U/Th (ウラン / リウム) 年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。較正曲線のデータは IntCal 13、較正プログラムは OxCal 4.3 である。

曆年代（較正年代）は、¹⁴C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した曆年代の幅で表し、¹⁴C の確率法により 1σ (68.2% 確率) ^{シグマ} と 2σ (95.4% 確率) で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の 1σ ・ 2σ 値が表記される場合もある。() 内の%表示は、その範囲内に曆年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C 年代の確率分布、二重曲線は曆年較正曲線を示す。

第8表 放射性炭素年代測定結果

試料No.	測定No. (IAAA-)	$\delta^{14}\text{C}$ (‰)	¹⁴ C 年代 : 年 BP (曆年較正用)	曆年代（較正年代）: cal-	
				1σ (68.2% 確率)	2σ (95.4% 確率)
No.1 炉穴 1	190723	-23.44 ± 0.17	9310 ± 40 (9307 ± 37)	BC 8623-8541 (58.7%) BC 8507-8490 (9.5%)	BC 8701-8675 (2.4%) BC 8648-8443 (92.4%) BC 8364-8355 (0.6%)
No.2 炉穴 3	190724	-22.24 ± 0.18	9280 ± 40 (9277 ± 35)	BC 8596-8586 (3.9%) BC 8572-8464 (64.3%)	BC 8625-8422 (88.5%) BC 8407-8389 (2.1%) BC 8381-8349 (4.8%)
No.3 炉穴 4	190725	-21.98 ± 0.17	9320 ± 40 (9322 ± 36)	BC 8631-8547 (66.2%) BC 8500-8496 (2.0%)	BC 8704-8671 (5.7%) BC 8655-8468 (89.7%)
No.4 炉穴 5	190726	-26.09 ± 0.17	9300 ± 40 (9296 ± 37)	BC 8616-8536 (51.2%) BC 8513-8484 (17.0%)	BC 8639-8426 (93.1%) BC 8402-8395 (0.4%) BC 8373-8352 (1.9%)
No.5 炉穴 7	190727	-27.19 ± 0.17	9270 ± 40 (9273 ± 36)	BC 8596-8586 (3.4%) BC 8572-8458 (64.8%)	BC 8622-8421 (86.6%) BC 8407-8388 (2.7%) BC 8382-8349 (6.0%)
No.6 炉穴 8	190728	-28.29 ± 0.17	9320 ± 40 (9317 ± 39)	BC 8631-8542 (61.1%) BC 8506-8490 (7.1%)	BC 8707-8667 (5.6%) BC 8658-8453 (89.8%)

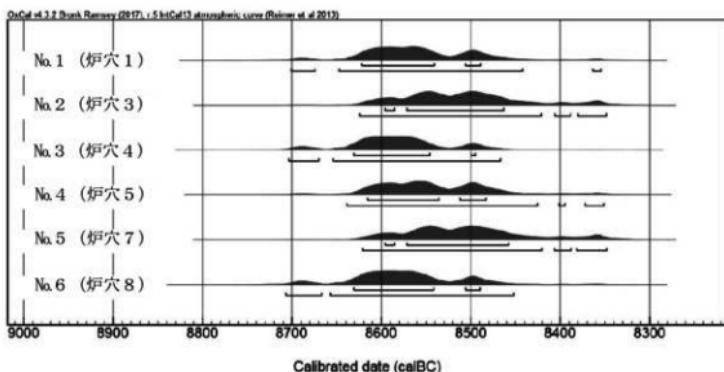
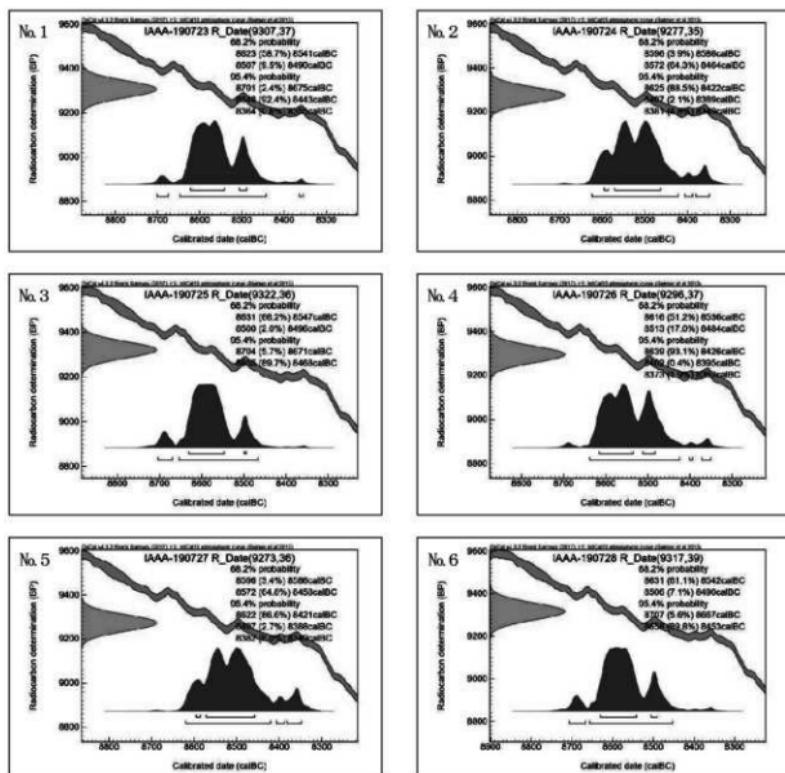
BP : Before Physics (Present) AD1950 基点, cal : calibrated, BC : 紀元前

第4節 所見

加速器質量分析法(AMS)による放射性炭素年代測定の結果、No.1(炉穴1)では9310 ± 40年BP(2σの曆年代でBC 8701～8675, 8648～8443, 8364～8355年)、No.2(炉穴3)では9280 ± 40年BP(BC 8625～8422, 8407～8389, 8381～8349年)、No.3(炉穴4)では9320 ± 40年BP(BC 8704～8671, 8655～8468年)、No.4(炉穴5)では9300 ± 40年BP(BC 8639～8426, 8402～8395, 8373～8352年)、No.5(炉穴7)では9270 ± 40年BP(BC 8622～8421, 8407～8388, 8382～8349年)、No.6(炉穴8)では9320 ± 40年BP(BC 8707～8667, 8658～8453年)の年代値が得られた。

文献

- 中村俊夫(2000)放射性炭素年代測定法の基礎、日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C年代」、日本第四紀学会、p.3-20.
- 中村俊夫(2003)放射性炭素年代測定法と曆年代較正、環境考古学マニュアル、同成社、p.301-322.
- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.
- Paula J Reimer et al., (2013) IntCal 13 and Marine 13 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55, p.1869-1887.



第49図 历年較正結果

第5章 総括

旧石器時代

VI・VII層とVIII層より出土した。VIII層はブロックが1箇所、石材の主体は日東産黒曜石である。この黒曜石は不純物が多いために剥片剥離が困難であるうえ刃部が劣化しやすい。そのため剥片は不定形で小型のものが多く、製品はナイフ形石器1点（未完成）のみであった。

VI・VII層はブロックが2箇所あり、斜軸尖頭器1点、剥片尖頭器3点、ナイフ形尖頭器1点、角錐状石器1点が出土する。石材の主体はVIII層と同じく日東産黒曜石であるが、製品は斜軸尖頭器のみであり、他の製品は砂岩や流紋岩を用いている。これは距離が近く入手が容易な日東産黒曜石とは別に、製品の製作を目的として遠隔地の良質な石材を入手していたことを窺わせる。17・18は、そうした意図で持ち込まれた素材剥片と考えられる。

終末期には流紋岩製の船野型細石刃核も出土している。しかし出土はこれのみであり、詳細については不明である。

旧石器時代において複数の文化層を持つ石器群の調査事例は、近隣では小田元第2遺跡が挙げられる。本遺跡のVII層の石器群は小田元2期、細石刃核は小田元4期に比定できる。

縄文時代

縄文時代の遺物はB・C区とA区上段、遺構はC区北側に分布していた。

炉穴はC区北側から10基検出された。南側は5基が概ね東から西へ一直線に伸びており、北側では南北に2基、東西に2基確認した。土層断面の観察から、炉穴は9→8→7→5→4と、天井の崩落の度に構築し、台地縁辺部に延びたと推測される。このような現象は西都市別府原遺跡をはじめ宮崎平野でしばしば見られる（宮崎県埋蔵文化財センター 2002）。炉穴は熱により燃焼部の壁面が赤化したものが多いためである。炉穴は焼製した料理を作る施設と考えられており、本遺跡でも食糧加工を行っていたと考えられる。なお、前述の別府原遺跡では炉穴燃焼部でユリ科鱗茎の炭化物が採取され、縄文時代早期の植物食が想定されているが、本永寺原には同じくユリ科のノビルが多く自生している。炉穴底面付近で採取した炭化物を年代測定した結果は第IV章で述べたとおりだが、9,322BP～9,277BPとの結果が得られ、約50年間に集中して造られたと考えられる。

本遺跡では少量ながら中原II式、別府原式、吉田式、下剥峯式が出土した。いずれも南九州から中九州を分布域とする土器型式であり、撚糸文土器や押型文土器など異系統の土器は含まなかった。時期は下剥峯式を除いて縄文時代早期前葉に編年される。清武上猪ノ原遺跡では、他の遺跡で確認した年代測定結果も含め中原II式（9,200BP）、別府原式（9,200～8,900BP）、吉田式（9,200BP）、下剥峯式（8,960～8,880BP）としており、下剥峯式土器を除いて凡そ炉穴に近い測定値となった。

石器は、原礫の大きい日東産の黒曜石も確認されたが、原礫が小さくても石器製作に適した桑ノ木津留産の黒曜石が主体を占めている。石鎌以外の剥片石器や磨石・石皿類の出土は乏しいことから、加工場は調査区外に存在した可能性も考えられる。

なお、縄文時代早期末以降もC区から土坑や埋納土坑を検出した。このことから定期的な人

の往来が推測されるが、資料に乏しいこともあり詳細な内容は不明である。

中世

C 区からは、Ⅲ層上面において中世の遺構が多く検出された。

検出された遺構は掘立柱建物 6 棟、土坑 1 基である。調査区の制約で掘立柱建物の規模が分かるものは 2 間 × 2 間であることを確認した掘立柱建物 5 のみであるが、概ね 2 間 × 2 間、もしくは 2 間 × 3 間が主体と考えられる。なお掘立柱建物 2 は確認できた範囲で 2 間 × 4 間であり、長辺に庇を伴うことから、掘立柱建物群でも中心的な施設であった可能性が推測される。

検出された掘立柱建物は規模の違いはあるが向きは東西方向より南東一北西方向にほぼ統一していた。調査で検出された柱穴の密度から、掘立柱建物群の存在した期間は限定的と考えられる。これら掘立柱建物の用途としては倉庫や居館が推測されるが、詳細は不明である。

なお土坑については具体的な用途は不明である。ただ埋土が似ていることから、掘立柱建物と併行または近い時期の遺構と推測される。

近世以降

A 区の中段は、緩やかな斜面を平坦にするために大規模な造成が行われた。これは本永寺の寺域を整備するためと考えられる。

井戸は周辺の斜面を抉っていることから、中央を造成し寺が営まれた後、何らかの必要が生じたため、斜面を削って構築したと考えられる。なお井戸や石壙に用いられた切石は所謂「高岡石」である。これは高岡市街地と本永寺原の中間地点にある赤谷地区で切り出された溶結凝灰岩と思われ、軟質で軽く、加工しやすいことから宮崎平野でも広く用いられる石材である。

石壙遺構は、礫内側の黒変から、遺構内で火を用いたと考えられる。豊田浩章氏は石壙みを伴う遺構を分類する中で、石壙みを行い、底に石を敷かない施設について、火葬場や便所、人糞を堆肥化するための燃焼施設等の可能性を挙げている（豊田 1991）。なお北九州市小倉城下屋敷跡でも構造、規模共に酷似する石組遺構が検出されており、崩跡と報告している（財團法人北九州教育文化事業団 1998）。

廃棄遺構からは瓦、陶磁器が大量に出土した。出土した陶磁器は、一般的な碗や擂鉢等、庶民的な器種が主体を占めるが、少量ながら大皿、青物、白薩摩、輸入磁器などの貴重品も含まれており、藩から重視された寺院的一面を垣間見ることができる。出土した陶磁器の製作年代は近世後期～幕末が多い。これらは寺の廃絶時に寺に残存していた陶磁器と推測される。これらの陶磁器は 2 つに割れたものが多いこと、割れたものの同士が接合し完形になる事例が非常に少ないことも特徴であるが、調査範囲の制約のためと考えられる。また瓦については、廃絶に伴って寺院内の建物を解体したと推測される。

A 区は本永寺廃絶後、切石を積んで石壙を設け、畠地としての利用が始まったと考えられる。なお石壙に隙間が多いのは、構成する切石が石壙を目的として切り出したのではなく、廃絶された寺院に残っていた石を用いたためと推測される。

今回調査した A 区は、本永寺原の由来となった本永寺の縁辺部にあたる。調査面積は限られていたが、その中で石壙遺構や井戸、廃棄遺構などを確認した。これらは、山間部に営まれた

近世寺院と、その後の空間利用を窺うことができる一例として、今後調査を行うにあたり先鞭となれば幸いである。

(参考文献)

- 高岡町教育委員会編 1999『小田元遺跡 久木野遺跡(5~7区)』高岡町埋蔵文化財調査報告書 第17集
高岡町教育委員会編 2003『小田元第2遺跡』高岡町埋蔵文化財調査報告書第29集
野尻町教育委員会編 1990『新村遺跡・高山遺跡ほか』野尻町文化財調査報告書第4集
佐々木真理 2005「日向における法華弘教の展開について」『宮崎県地域史研究』第18号
豊田浩章 1991「関西における石積み土壙の諸問題」『関西近世考古学研究』II
宮崎市教育委員会 2018「清武上猪ノ原遺跡第5地区」宮崎市埋蔵文化財調査報告書 第119集
宮崎県埋蔵文化財センター 2002「別府原遺跡 西ヶ迫遺跡 別府原第2遺跡」
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第61集
財団法人北九州市教育文化事業団 1998『小倉城下屋敷跡』北九州市埋蔵文化財調査報告書第222集



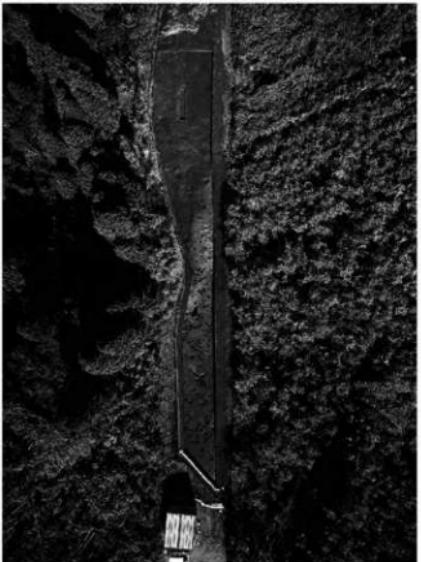
A区空中写真（東から）



A区空中写真（真上から）



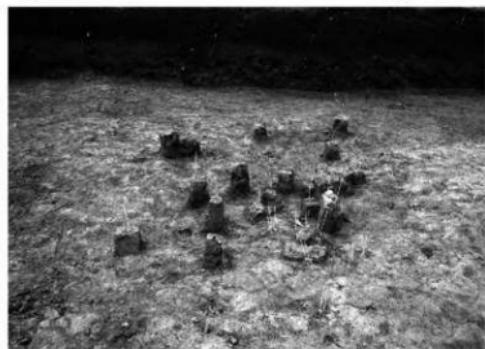
B区空中写真（真上から）



C区空中写真（真上から）

図版 6

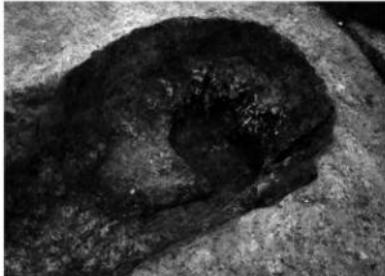
旧石器時代・縄文時代遺構（炉穴）



左上：C区中央部西壁土層断面
(東から)
右上：C区突出部（西壁）土層断面
(東から)
左：B区旧石器時代（弥歴）遺物出土状況
(東から)
左下：C区炉穴検出状況
(南東から)
右下：C区炉穴完掘状況
(南から)



縄文時代遺構（炉穴・土坑）



左上：C区炉穴1焼土検出状況（南から）

右一段目：C区炉穴5焼土検出状況（東から）

右二段目：C区炉穴7焼土検出状況（東から）

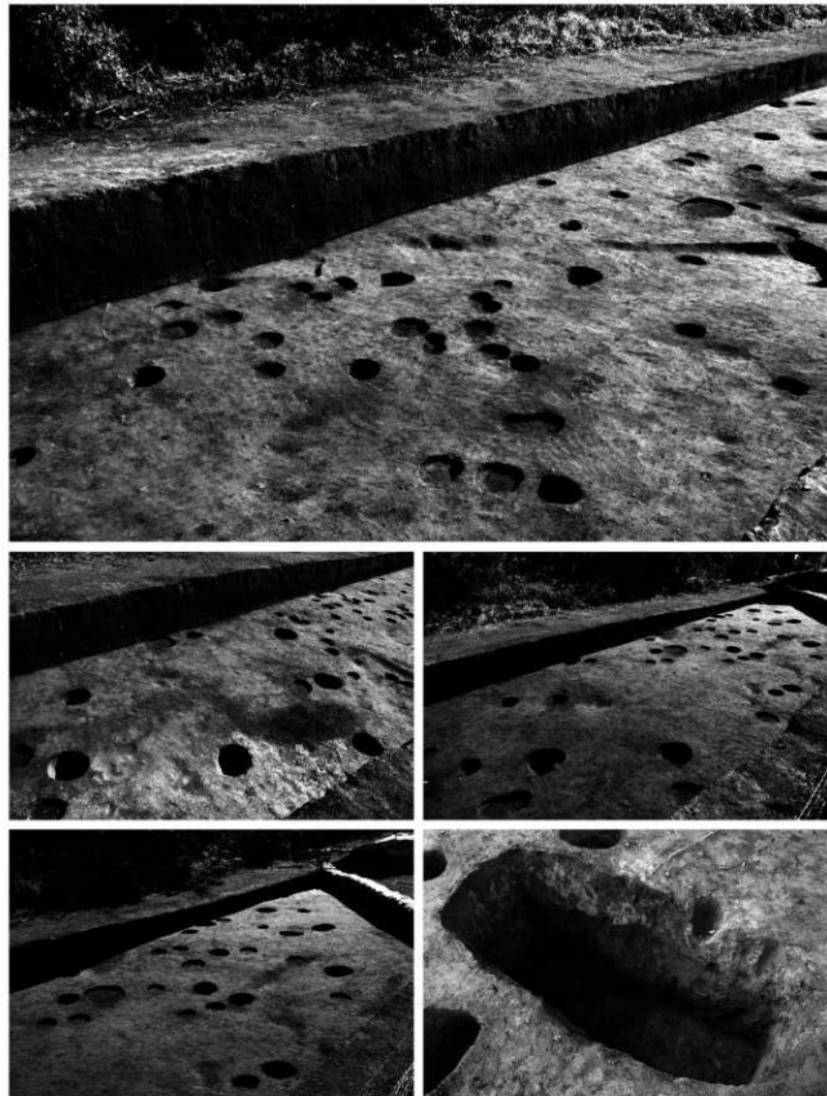
左：C区炉穴8検出状況（東から）

左下：C区縄文時代土坑検出状況（北東から）

右下：C区縄文時代土坑完掘状況（東から）



中世遺構（掘立柱建物・土坑）



上 : C区掘立柱建物跡検出状況（北西から）
中段左 : C区掘立柱建物6検出状況（北西から）
中段右 : C区掘立柱建物3検出状況（北西から）
左下 : C区掘立柱建物1、2検出状況（北西から）
右下 : C区中世土坑完掘状況（東から）

近世遺構（石圓遺構）



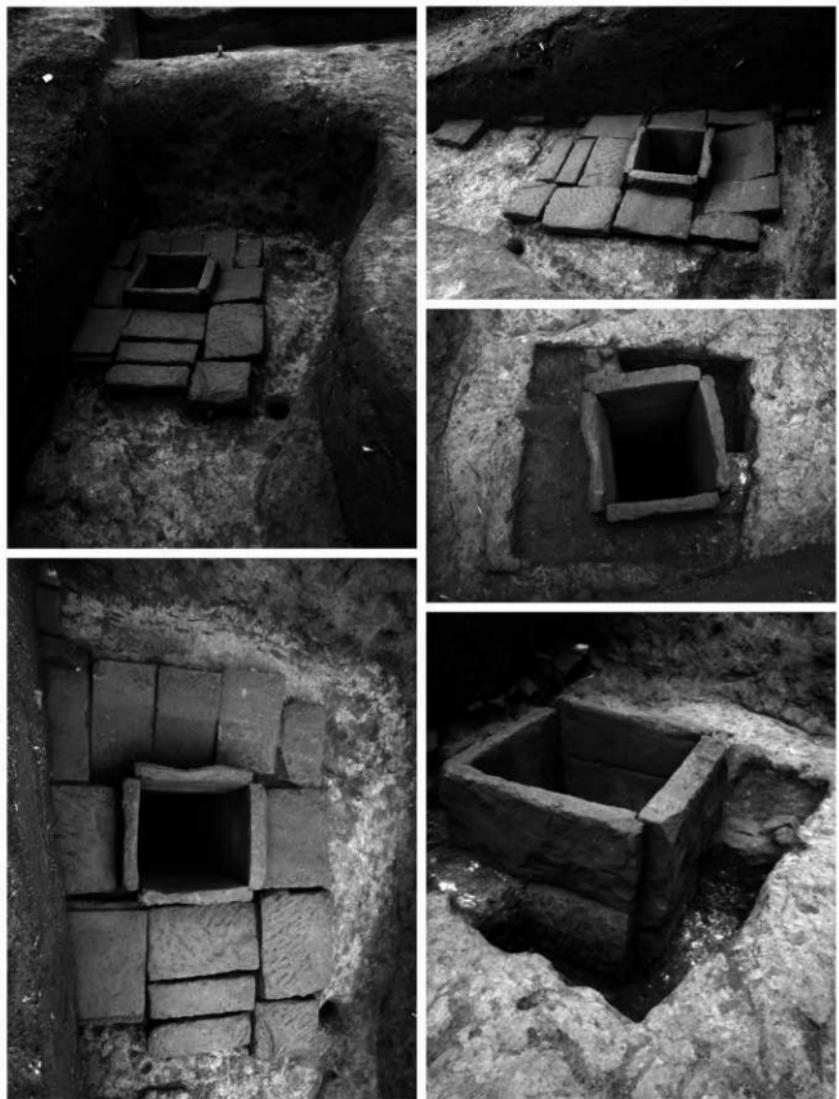
上：石圓遺構検査状況（東から）
左下：石圓遺構検査状況（北西から）
右上：石圓遺構検査状況（東から）
右下：石圓遺構完結状況（東から）

近世遺構（石壠・廃棄遺構・井戸）



左上：A区石壠検出状況
（南東から）
右上：A区石壠+廃棄遺構検出状況
（南東から）
左：A区廃棄遺構検出状況
（南東から）
下：A区井戸検出状況
（北西から）



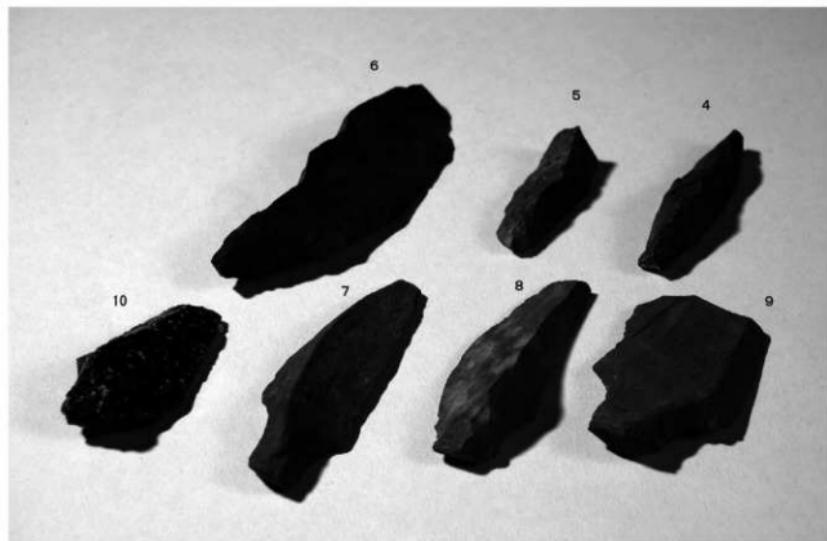


左上：A区井戸検出状況（東から）
右上：A区井戸検出状況（北西北から）
右中：A区井戸掘方検出状況（真上から）
左下：A区井戸検出状況（真上から）
右下：A区井戸掘込検出状況（北東から）

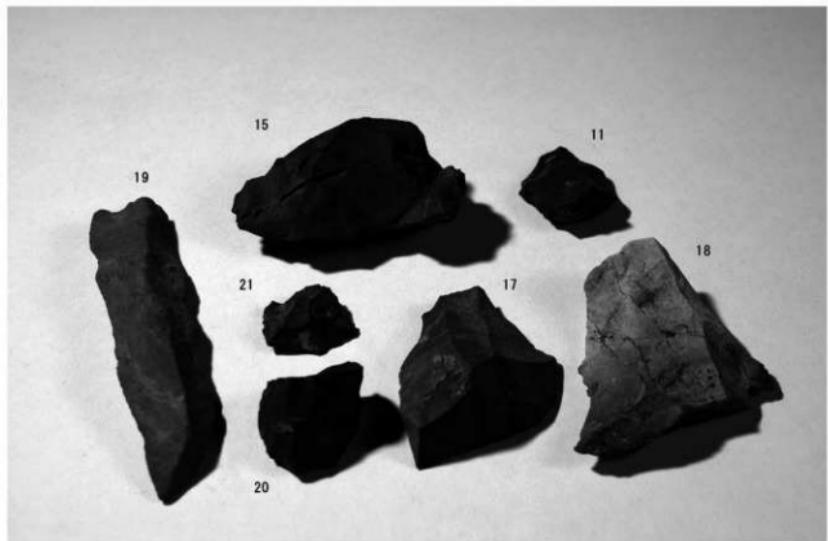
旧石器時代出土遺物 1



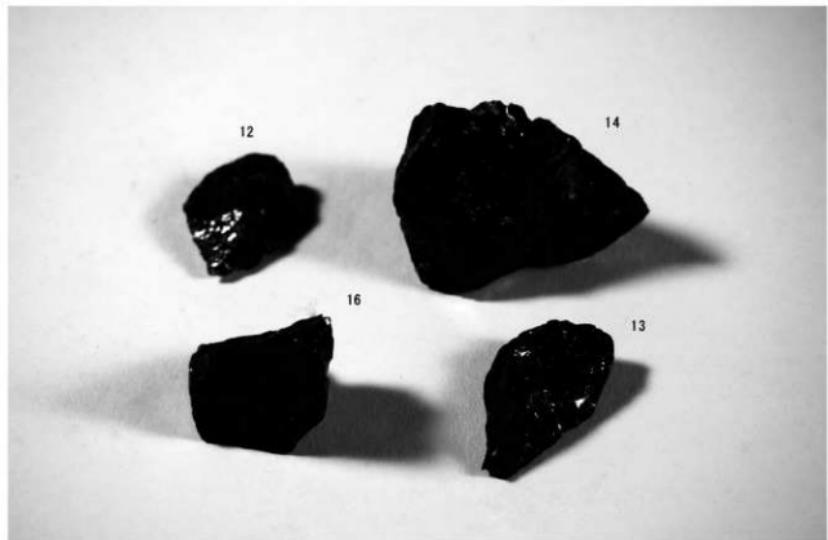
旧石器時代出土遺物（VII層）



旧石器時代出土遺物（VI・VII層）

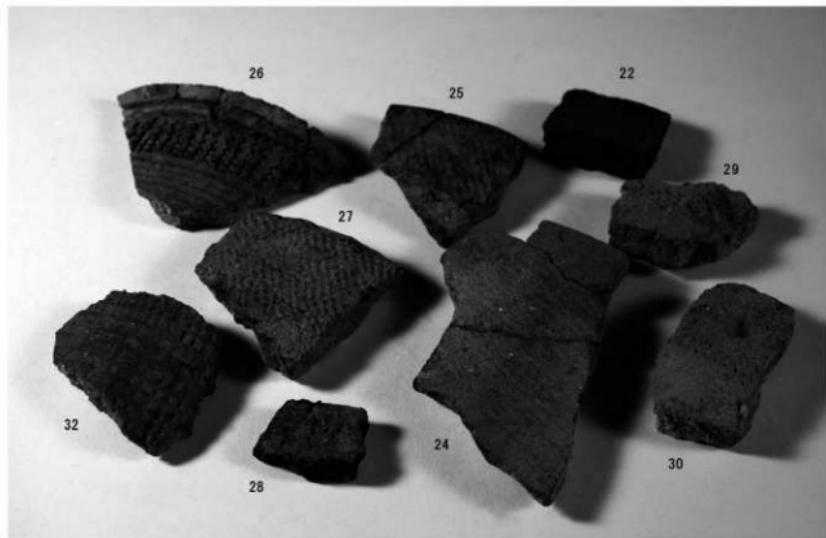


旧石器時代出土遺物（VI・VII層）

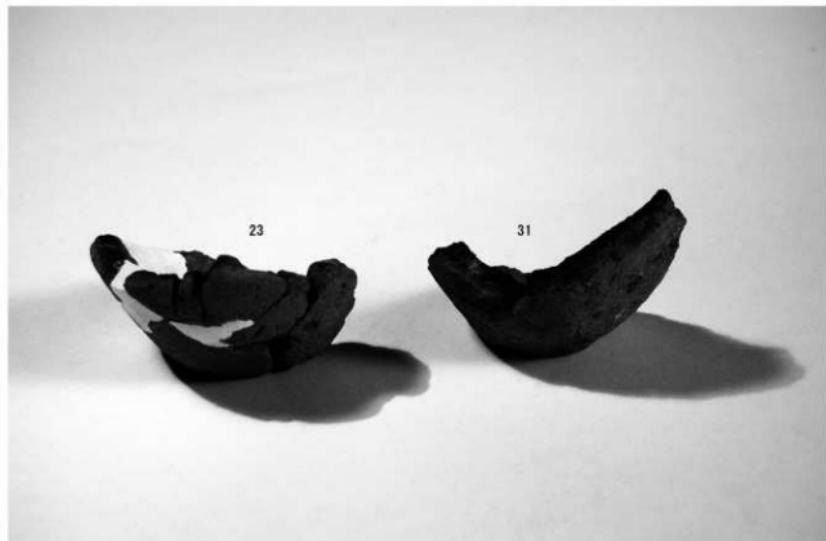


旧石器時代出土遺物（VI・VII層）

縄文時代出土土器

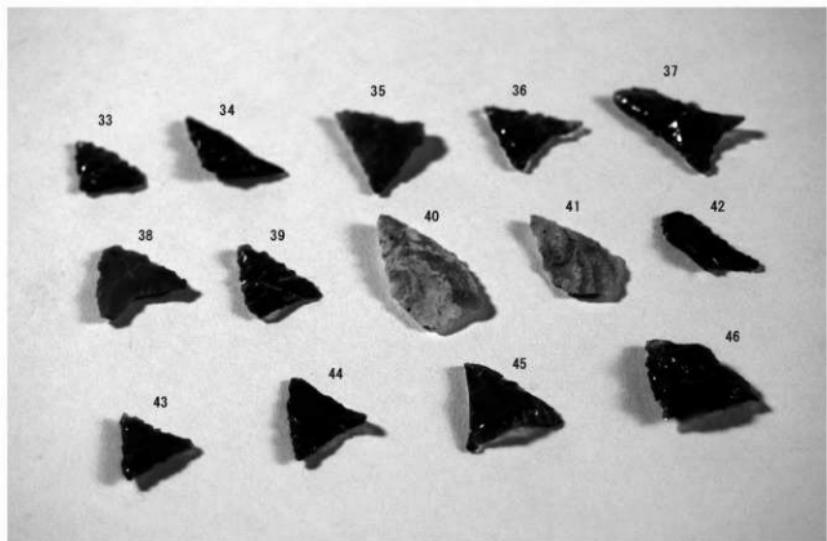


縄文時代出土土器

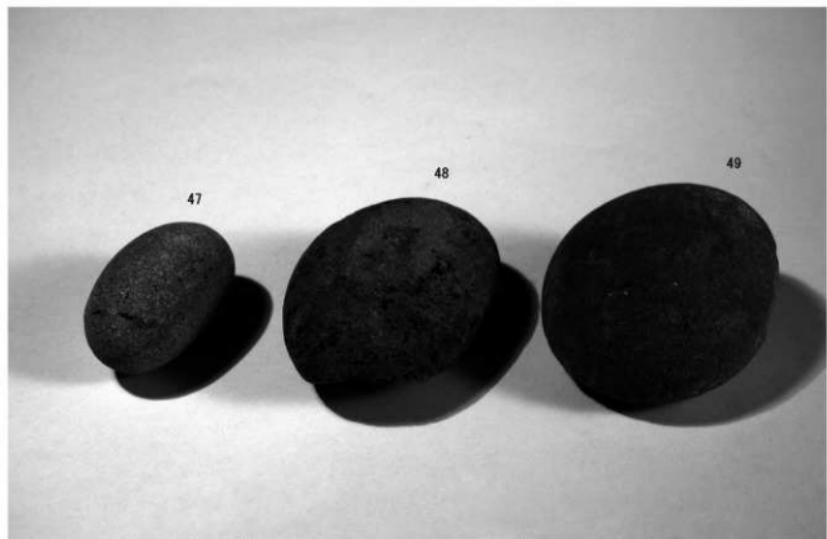


縄文時代出土土器（底部）

縄文時代出土石器 1



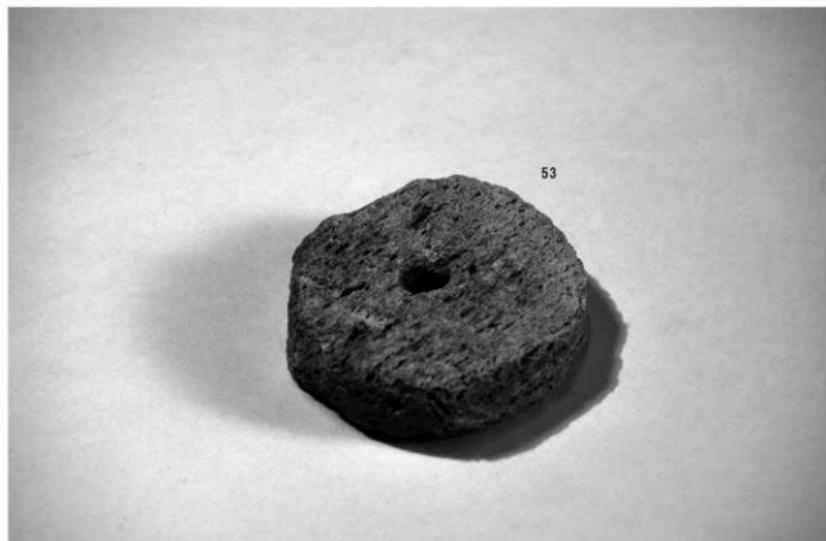
縄文時代出土石器（石鏃）



縄文時代出土石器（磨石）

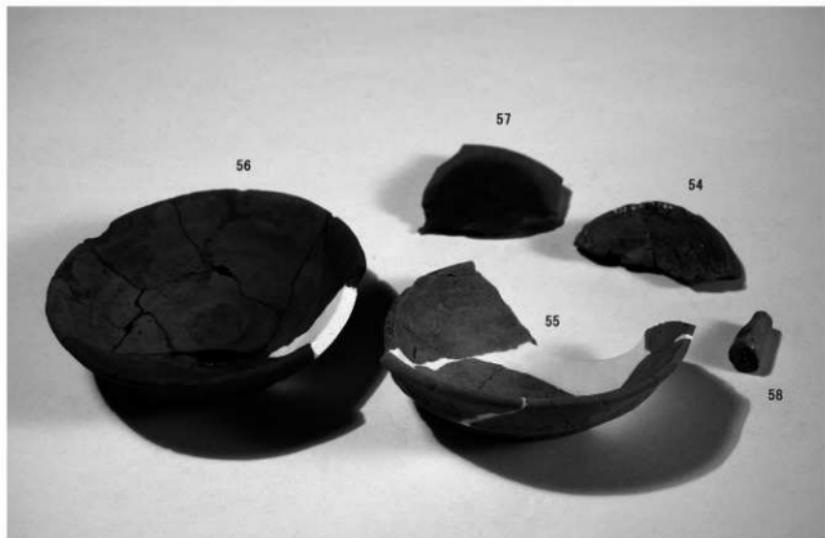


縄文時代出土石器（日東産黒曜石）

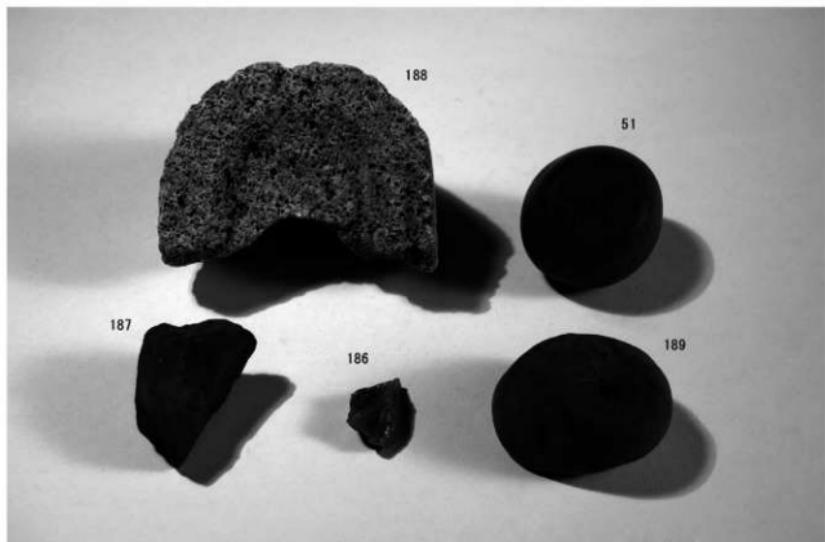


縄文時代出土石器（軽石製石製品）

中世出土土器・近世以降出土石製品 1

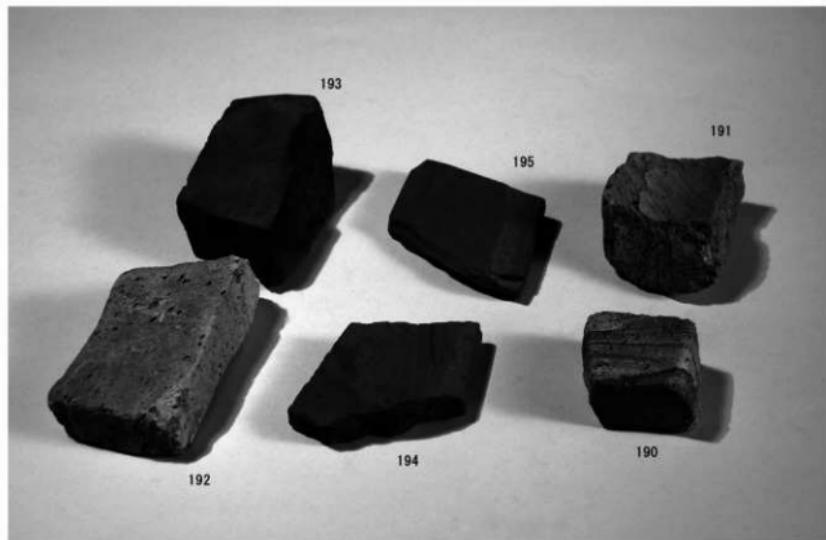


中世出土土器



近世以降出土石製品

近世以降出土石製品 2



近世以降出土石製品（砥石）



近世以降出土石製品（砥石）－実測図未掲載分一

報告書抄録

ふりがな	ほんえいじばるいせき					
書名	本永寺原遺跡					
副書名	基幹農道整備事業小田元4期地区A工区に伴う埋蔵文化財発掘調査					
卷次						
シリーズ名	宮崎市文化財調査報告書					
シリーズ番号	第141集					
編集者名	金丸 武司					
発行機関	宮崎市教育委員会					
所在地	〒889-1603 宮崎市清武町西新町1番地1					
発行年月日	令和4年3月					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査原因
ほんえいじばるいせき 本永寺原遺跡	みやざきけんみやざきし 宮崎県宮崎市 たかおかわらうらのみょう 高岡町浦之名	45201	36-012	31° 57' 28" 付近	131° 13' 34" 付近	道路建設
種別	調査期間	調査面積	主な時代	主な遺構	主な遺物	
社寺跡	H30. 6. 1 ～ H31. 3. 22	2,569m ²	旧石器時代		剥片尖頭器、角錐状石器	
			縄文時代	炉穴、土坑、埋納土坑	土器、石鐵、剥片	
			中世	掘立柱建物、土坑	坏	
			近世以降	石匂遺構、土坑、石塀 井戸、造成跡、 廃棄遺構	陶器、磁器、染付、 鬼瓦、瓦	

宮崎市文化財調査報告書 第141集

本永寺原遺跡

令和4年3月
宮崎市教育委員会